

令和 4 年 4 月 28 日

Vo 1.29

防衛大学校同窓会機関紙

小原台だより



令和3年度3大隊優勝の瞬間

電子版第7号

目 次

◆ 防衛大学校同窓会長からのご挨拶	P 2 ~ 3
◆ 学校長に聞く	P 4 ~ 6
◆ 前学校長（國分良成氏）に聞く	P 7 ~ 9
◆防衛大学校関連	
◇ 新副校長（末吉陸将）に聞く	P 10 ~ 12
◇ 新副校長（赤瀬氏）に聞く	P 13 ~ 15
◇ 令和3年度水泳大会について	P 16 ~ 17
◇ 第21期期生会献花式	P 18 ~ 20
◆同窓生は今	
◇ 第65期生に聞く	P 21 ~ 30
◇ 今人生、真っ盛り（27期生）	P 31 ~ 42
◆活動報告	
◇ 令和3年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）	P 43 ~ 45
◇ 第44期生ホーム・ビジット・デー（HVD）	P 46 ~ 47
◇ インドネシア共和国支部会員の近況	P 48 ~ 51
◆会長ルーム・活動録	
◇ 令和3年度防衛大学校卒業式典への出席	P 52 ~ 54
◇ 防大同窓会モンゴル国支部長に対する委嘱状授与	P 55 ~ 57
◆ 連絡事項	P 58 ~ 66
◆ 編集後記	P 67

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶

2022. 4. 13



防衛大学校同窓会長 岩田 清文

昨年4月、岩崎前会長の後を受け、防衛大学校同窓会会長を拝命しました岩田です。同窓会の近況について紹介させて頂きたいと思います。

防大では、本年3月に第66期生が卒業し、4月には第70期生が入校しました。従来であれば、多くのご来賓が見守る中、盛大かつ凛々しく式典が挙行されるところでありますが、昨年同様、新型コロナウイルスの影響を受け、限定された来賓の方々と学校関係者が出席する中での開催となりました。もちろん卒業式には、岸田総理が来校され、卒業生に対して訓示をされております。

また卒業式にはホーム・カミング・デー（HCD）行事として第22期生が、そして入校式にはホーム・カミング・デー2（HCD2：入校から60年経過した卒業生）行事として第8期生及び第9期生が、学校長からご招待頂く運びとなっておりましたが、式典規模の縮小により3年連続して中止となりました。両行事共に、同窓生の親睦交流及び母校と同窓生を繋ぐ伝統行事として継承されていく中での中止であり、大変残念に思うところです。当該期であります第22期生及び第8・9期生の先輩方は、これまで精力的にご準備をされてきたところ、貴重な機会を延期されたことを、残念に思っておられることと推察致します。来年こそは、桜花爛漫の中、両行事が開催され、本科及び研究科学生とともに、母校において同窓会会員相互の絆が深まることを願っております。

同窓会の現状について少し触れたいと思います。防大同窓会の会員数は現在、約2万5千800名（現役自衛官【以下現役】約1万1千900名、自衛官退職者【以下OB】約1万3千500名、留学生約400名）であり、これまでは逐年OB数が増加する傾向にありました。一方で一昨年3月には第1期生が、同年12月には第2期生が、昨年3月には第4期生が期生会としての組織的な活動に終止符を打つことが報告されたことから、同窓会の会員数及び現役とOBの比率もほぼ一定値に落ち着く時期に達したという認識を持っております。

同窓会の活動としては、母校の充実・発展への寄与を主体とし、併せて同窓会会員の親睦交流に資する諸施策を継続しております。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、支援対象となる防大での諸行事、訓練等が中止または縮小を余儀なくされたため、多くの支援事業の実施が困難になるとともに、同窓会会員相互の親睦事業も全て中止することとなりました。さらに、参集による同窓会代議員会の開催に関しても3年連続での中止を余儀なくされ、郵送処置による議案の議決に委ねたところであります。これらの判断、処置は、国民一人ひとりが耐えながら感染対策に集中し、その行動を自粛している間は当然のことです。また防大同窓会活動が起因となり感染者を発生させることはあってはならないことと認識しております。

防大は、昨年4月、これまで9年間にわたりご指導賜った國分学校長の後を受けて久保学校長がご着任され、卓越したご指導の下、時代の変化に応じた改革が進められているところです。一方で、学生にもコロナ感染者が発生するなど、校務運営にも様々な対応を迫られてきたところです。今後、早い時期に、逐次従来の運営に戻れることを祈念しております。

同様に同窓会活動も元の状態に復帰し、母校の充実、発展に寄与するとともに、会員相互の親睦交流が盛んになることを願っております。特に、昨今の現役の活動においては、日米同盟の更なる強化はもちろん、日米豪印戦略対話（QUAD）を始めとする国際的連携強化の推進など、軍事的な国際舞台においてリーダーシップを取り得る幹部の育成が強く求められているものと認識しています。このような観点においても、今後同窓会としてさらに寄与できる施策についての検討も進めていきたいと考えております。

当然のことながら、同窓会の活動は会員皆様の「母校のため、後輩のため」という熱い思いに基づくご支援ご協力がなければできません。我々同窓会役員一同は、学校長始め防大の関係者、そして会員皆様方のご意見を賜りながら会員皆様と連携しながら、尽力して参る所存です。どうか皆様方におかれましても、様々な形で母校へのご支援、ご声援を賜れば幸甚に存じます。

時節柄、皆様にはくれぐれもご自愛のほど、祈念申し上げ、甚だ簡単ではありますがご挨拶にさせていただきます。（了）

◆学校長に聞く

「様々な大学と様々な教え方—体験的比較論」



防衛大学校長 久保 文明

本年4月1日付で防衛大学校長に着任しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

自己紹介を兼ねて、これまで学生・教員(以下、教官も教員で統一)として経験した大学教育について、振り返ってみたいと思います。

東京大学法学部で受けた教育は、毎学期ゼミを履修したために少人数での学習もでき、個人的にはそれほど悪いものであると感じませんでした。ただし、よく法学部砂漠などと揶揄されますように、ゼミを除くと600人以上の学生と一緒に講義を聞き、その場での質疑応答はほぼ皆無という授業形式が一般的でした。

筑波大学に専任講師として就職して、教育についての認識は大きく変わりました。学生数が少なく、教員と学生の関係は親密でした。例えば政治学専攻においては、教員6人に対し、学生は1学年で10-15人程度。学生の関心に応じて自主的な読書会に付き合っただけの教員もいました。私は教育研究科というところでも授業を担当しましたが、これは中学や高校の現職教員を再教育するために設置された修士課程であります。教員には多数の教育学の専門家がいましたが、中学・高校の教員経験者も含まれていました。社会科教育、英語教育などという形で専攻が分かれていて、定期的に専攻対抗のソフトボール大会も開催されました。現場の教員出身のある長老の先生はまさに校長先生といういで立ちで上下白のトレパンに身を包みつつ、ずっと立ったまま朝から夕方まで社会科専攻チームを応援していました。脱帽せざるを得ませんでした。ちなみに、私は終日見ているだけの応援は耐え難かったので、試合に参加させてもらいました。

その後、筑波大学から研究休暇をもらい、2年間コーネル大学にて研究する機会を得ました。歴史学部および政治学部のいくつかの講義やセミナーに参加させてもらいましたが、そこで驚いたのは、高名な教授たちが例外なく示した

教育に対する情熱でした。とくにアメリカ現代史のリチャード・ポーレンバーグとアメリカ外交史のウォルター・ラフィーバーの2人は傑出していました。もともと記憶力がよいのかもしれませんが、ノートも教科書も持たずに教室に来て、何も見ずに流れるように、しかし、わかりやすくまたユーモアを交えて講義を行ないました。ポーレンバーグ教授にはなぜこのようなことができるのか聞いてみたことがあります。講義の前には何時間か集中して、その日の内容をしっかり暗記するとのことでした。そこまでして暗記しようとするのはまさに驚きでした。

定刻前に教室に行き、必要な板書を済ませておく教員を見たのも、初めてのことでした。アメリカではこれは珍しいことではありません。日本では遅れて教室に来る教員が多数存在します。

1988年に筑波大学から慶應義塾大学法学部に異動しました。学生は3年生から4年生までの2年間を同じ教員のゼミに所属し、卒業論文と称されるゼミ論文を執筆します。ゼミ所属は必修ではないのですが、多くの学生は所属を希望します。ここで印象的でしたのは、教員がゼミ学生と公私ともによく付き合うことです。多くのゼミは合宿を年2回実施するので、学生は2年間で4回教員とともに小旅行を経験することになります。新歓コンパ、追いコン、新年会等飲み会もやたら頻繁に開催されます。教員によっては毎週ゼミの後に学生を飲み連れ歩いていました(これは明らかにやり過ぎです)。教え子の結婚披露宴にも頻繁に招待されます。東大と比べると、教員が学生のために割く時間はかなり多いし、ゼミOBOG会が定期的で開催されるのも普通のことです。

東大法学部のゼミのほとんどが1学期(すなわち3-4か月)完結であり、学生数がやたら多い場合もあり、コンパすら開かれぬこともあるのとまことに対照的です。

さて、2003年4月からその東大法学部で授業を担当することになりました。慶應でのゼミに慣れていたので、ゼミは1学期完結とせず通年で開講しました。2年間ゼミは制度的に不可能でしたが、通年であればゼミ論文の執筆を要件とすることができ、また学生とある程度親しく付き合うこともできます。3年から4年へと2年間履修してくれた学生もいました。

このように、国による違いのみならず、大学によっても学部学生に対する教育の仕方は異なっています。防衛大学校の場合、夕食前に校友会活動があり、近くに店もないので、残念ながらゼミ終了後に飲み屋で一杯というわけにはいきません。しかし全寮制であり、学生40人程度に1人の指導教員が付いている点では、オックスフォード大学やケンブリッジ大学等のカレッジが提供している指導体制に引けを取りません。全体として少人数教育はかなり徹底していて、卒業研究までしっかり指導体制ができています。大学の使命も幹部自衛官

の養成と明確ですし、就職活動の心配をする必要もありません。すでに海外留学の機会は多数提供されていますが、さらに増やせないか現在模索中です。

私の指導教員の一人は斎藤眞先生でした。東京帝国大学の学生から海軍に学徒出陣しニューギニアで終戦を迎えられました。年若くても指揮官でした。ほぼ1年間帰国できず、現地に残された部隊をまとめるのに大変苦勞された話を伺ったことがあります。何とか統率できるようになったのは、年上で屈強な部下たちと一緒に酒を飲みかわすようになってからとのことでした。この話を聞いたのは、学部4年生で参加したゼミの飲み会でのことでした。先生はついつい天狗になりがちな東大法学部生に対して、決して威張ってはいけない、同じ目線で部下と心を通わすことが肝要であるということを伝えようとしたのであろうと想像しています。東大法学部の制度は学部生には全体としてやや冷たいところがあるものの、恩師の言葉を思い出すと、ゼミに関する限り捨てたものではないのかもしれないと思います。と同時に防大から、このような部下の心を掴むことができる卒業生が今後さらに多数巣立って欲しいと願う次第です。

着任して3か月弱しか経っておらず、まだまだ新参加者です。ぜひともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

◆前学校長（國分良成氏）に聞く

「前防衛大学校長の状況報告」

第9代防衛大学校長 國分 良成



防衛大学校長を退任してからちょうど1年が過ぎました。2012年から9年間の勤務でした。当初は、おそらく4～5年で「原隊」の慶應に戻るのだろうと思っていましたが、結果としてかなり長居してしまいました。その間、退路を断った方がすっきりするだろうと、定年前でしたが、慶應にも退職届を提出しました。慶應が嫌いだったわけではもちろんありません。学生時代から40年間、大好きでした、特に学生（塾生）は。

ところが、心底から防大が好きになってしまったのです。何よりも学生の素晴らしさ、それに自衛隊、とりわけ防大卒業生に魅せられてしまったということでしょうか。着任前にも、防大と幹部自衛官にはある程度の接触はありましたが、それはただの接触で、内側まで入り込むものではありませんでした。内側から見た感触と風景は、やはり外から見ていたものとは大きく異なりました。「どうしたら、こういう学生と卒業生ができるのだろうか」、教育に長年携わってきた者としての純粋な問いでした。それが、まさに「ここで挑戦してみたい」との「一念」となり、いつのまにか「久年」になりました。

防大に惹きこまれたもう一つの大きな理由は、榎智雄という初代学校長の存在とその生き方、考え方でした。正直なところ、慶應義塾の大先輩でありながら、わずかに名前に記憶がある程度、慶應では小泉信三塾長という巨人の陰に隠れてしまい、その片腕ともいえる榎先生の存在は慶應のなかでもほとんど知られていません。偉人の陰には必ず別の黒子の偉人がいる、これが歴史の常であります。

私は、防大学校長着任後、榎智雄先生の足跡に強い関心を抱きました。戦後の国難の時期に、様々な雑音があったであろう状況下で、なぜ自身の信念を貫くことができたのか。これに対する答えは、戦中にありました。榎先生は慶應

義塾の常任理事（いわば副塾長）として小泉塾長を支え、学校を守り抜いたのです。しかし時代は戦争、彼の思い描いた学園像は崩れました。戦後は失意のなかにあったと想像されますが、防大という新たな挑戦の機会に出会い、再起を期したのでしょう。彼の夢は防大小原台で再び開花し、見事に今日にいたる防大の基礎を創り上げたのです。

榎学校長はこよなく学生を愛しました。厳父でありながら、慈父でもあったのでしょう。何があっても学生を守り抜く、この点に揺らぎがありませんでした。学生たちは榎先生の愛情を受け止め、それに応えることで学校の基礎とともに創り上げていったのです。草創期、防大教育に対しては、内外から大きな期待と同時に批判もあったと推察されます。しかし、今日にいたる基礎を築いたのは、榎イズムを死守せんとするその後の学生諸君たちだったのです。

私にとって、榎智雄は防大の校長の師であり、模範でした。能力・人物ともに、私ごときではとても太刀打ちできませんが、在任中、榎先生の存在が防大の校長のあるべき矜持と哲学の拠り所となったように思います。とはいえ、私は榎智雄になることはできません。個性はみな違うからです。防大生が大好きな点では、私も誰にも負けないつもりですが、私には榎先生のようなカリスマ的威厳と包み込むような大人の優しさはありません。

むしろ私は、現代風に言えばもっとフットワークが「軽く」、学生のなかに自ら飛び込んで、自分も学生に同化して楽しんでいくタイプです。慶應の教員時代でも30年間、そのスタイルで通してきました。防大のような「ミリタリー・スクール」で、そうしたことが許されるのか。不安はありましたが、結局、理念を継承することはできても、個性は継承できないのです。

最も心配したのは、防大卒業生の現役自衛官と自衛官OB、つまり防大同窓会の反応でしたが、その懸念はただの杞憂に終わりました。防大同窓会の凄さは、現役のやることに対して、一切口を出さずに見守ってくれ、いったん学校長が決めたことはすべてそれに従うという点でした。それがまさにミリタリー世界の凄さなののでしょうか。往々にして、どこのOBOG会でも、「昔は良かった」と口を出すことで現役を委縮させることが多いのですが、ここはまったく逆でした。現役の応援に徹する防大同窓会、これからもこの精神と姿勢を忘れないでほしいと思います。

私は防大では3つの学年と同期です。学校の卒業では20期相当、しかし防大の校長に「入校」したときは60期が同期、そして退任時は65期と同期でした。9年の防大の校長在任中、防衛大臣は10人、延べで12人にのぼります。防衛副大臣は9人、延べで10人、防衛大臣政務官は22人、防衛事務次官は6人にのぼります。ちなみに、私を次期防大の校長に指名したのは、当時の民主党の北澤俊美大臣でした。

この9年間、防大内では教授から選出された副校長が3人（井上成美⇒渡邊啓二⇒香月智）、防衛省からの副校長が6人、陸上自衛隊の幹事（現副校長）が10人（田中敏明⇒田邊揮司良⇒岡部俊哉⇒森山尚直⇒小林茂⇒岸川公彦⇒上尾秀樹⇒納富中⇒原田智総⇒梶原直樹）、訓練部長が7人（山下万喜⇒岡浩⇒伊藤弘⇒湯浅秀樹⇒俵干城⇒金刺基幸⇒保科俊朗）、防衛学群長が7人（武藤茂樹⇒金古真一⇒引田淳⇒影浦誠樹⇒坂本浩一⇒中澤省吾⇒北川英二）。皆さん、本当にお世話になりました。心から感謝しています。

いまの私について少し付言しておきましょう。防大と慶應という2つの最高の大学を経験させてもらった以上、それ以外に大学関係に定職をもつことを現段階では考えていません。慶應での非常勤講師も終わり、40年間続いた大学教育は基本的に終わりました。今後は、あっても非常勤講師くらいでしょう。昨年5月から、内閣安全保障局長だった谷内正太郎氏が理事長を務める富士通フューチャースタディーズ・センターの顧問に就任していますが、非常勤職で自由出勤です。ちなみに、防大が学校長に着任するまでは富士通の社外取締役でもありました。それ以外に、昨年からは読売新聞の読書委員として月平均2冊の書評を書いています。今春からは別の新聞の大型コラムを年に2回ほど書くことにもなっています。また、アメリカとヨーロッパの大学や研究機関から、招待講演と短期滞在の招聘もいくつか来ていて、新型コロナが収束すれば、海外に飛び出す予定です。

ということで、結構忙しくしていますが、退任後1年の最大の仕事は、題名は未定ですが、学校長9年の経験を総括した「防衛大学校」についての単行本の執筆でした。現在、ようやく初稿を書き終え、これから編集と校正の作業に入ります。今夏には中央公論新社から刊行の予定ですが、その節はよろしく願いいたします。

本書を出版したあとは、9年間棚上げ状態になっていた研究者としての生活に戻る予定です。もともとそれが出発点ですので、振り出しに戻ります。特に、専門の「中国問題」は、いかなる国際問題を考えるにも最優先テーマであり、時代の要請でもあります。私は大学2年から約50年、「中国問題」と付き合い合っており、「時代がようやく私に追いついてきた」などと傲慢なことを考えております。

何はともあれ、防衛大学校同窓会の皆さまとは、残りの人生が終わるまで、親しくお付き合いさせていただければ、これに優る幸せはありません。

最後に、コロナ禍の厳しい状況下で、新たに着任され頑張っている久保文明学校長に対するご協力とご支援のほど、今後ともよろしく願いいたします。

◆防衛大学校関連

◇新副校長（末吉陸将）に聞く

防衛大学校副校長

陸将 末吉 洋明（33期・陸上）



はじめに 同窓会会員の皆様のご支援に感謝

同窓会の皆様、新年あけましておめでとうございます。昨年10月の異動で防衛大学校副校長を拝命しました33期生の末吉です。どうぞ宜しくお願いいたします。同窓会の皆様には部隊実習支援、校友会支援、国際交流支援等、平素より格別かつ温かいご高配を賜り心から感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

昨年、防衛大学校では、大方の大学とは一線を画しコロナ対策を実施しつつ対面授業、学生舎生活、校友会活動等をコロナ前のほぼ平常の状態に戻し校務運営を行いました。また11月13日、14日には2年ぶりとなる開校祭を入場者について一部のご家族に限定した上で実施いたしました。その際の顕彰碑献花式においても今年度3柱の御霊を新たに加えた108柱の御霊に対し岩田同窓会会長からの顕彰の辞、供花を賜るとともに多大なご支援を同窓会の皆様からいただきましたことに心から御礼申し上げます。

この度は同窓会本部事務局よりご依頼をいただきましたので最近の取り組みである調整部会、そして受験勧誘のお願い等について述べさせていただきます。

調整部会

まず調整部会についてです。本調整部会は、歴代の学校長、幹事のご尽力もあり、昨年度防衛大学校の諸課題について検討を行うため、事務次官を長とし各幕僚長、学校長、副校長等を構成員として「防衛大学校の充実・強化に関する調整部会」が設立されました。つまり、本部会設置により省全体として防衛大学校の運営、整備について検討し具体化するしくみが形成され、今年度から

実質的な議論に移行し、今後、次期大綱・中期との関連も含めて来年度にかけて検討予定です。

防衛大学校としては上記調整部会設置を受け「充実・強化に関するプロジェクトチーム（以下、防大 PT）」を設置しました。副校長（自衛官）を長とし、①安全保障環境、②人材確保・教育・研究、③学生指導・訓練、④魅力化（施設・基盤）の 4 つのワーキンググループ（以下 WG）を編成し、各グループ長に部長級を配置し学校横断的に検討を推進しています。具体的には、①安全保障環境 WG では、国際化を踏まえた取組、変化する安全保障環境に対応できる人材育成にかかる検討、②人材確保・教育・研究 WG では、入学試験の在り方、教育・研究体制の強化にかかる検討、③学生指導・訓練 WG では、学生間指導の在り方、学生支援の在り方にかかる検討、④魅力化（施設・基盤）WG では、学校としての防衛大学校の魅力化、より効果的な学生教育の在り方にかかる検討を行っております。また上記の 4 つの WG に跨る主なテーマとして防大中期整備計画等を検討いたします。具体的には検討結果を中心に事業化し、これまでにはなかった防衛大学校としての中期整備計画を具体化する予定です。

受験勧誘のお願い

次に、受験者数の現状と勧誘のお願いです。多大なご支援をいただいている中、更なるお願いで恐縮ですが、受験者数が少子化の影響を受け 2016 年から急激に減少しています。具体的には 2016 年 15,094 名であったところ 2021 年 10,124 名へ直近 5 年間で 4,970 名減少しています。正に危機的な状況と認識しています。要するにこの 5 年間で平均して 1 年毎に約 1,000 名が減少し受験者数が 3 分の 2 まで縮小していることになり偏差値もほぼ同様に下降傾向が続き、駿台予備校の数字で 69 期生は理工で 51、人社で 58 といった状況です。

防衛大学校としても陸上幕僚監部等と連携し地方協力本部のご協力を得つつこの危機的状況の改善に向けて奮闘中ではありますが、防衛大学校への深いご理解と関心を持つ同窓会の皆様についても是非ご協力を賜りたくお願いいたします。どうぞご親族、ご友人関係等で受験適齢期の方がいらっしゃれば積極的な受験勧誘をお願いします。

なお、本科の採用試験は以下の 3 種類があります。具体的には、推薦採用試験（高等学校長等がふさわしいと認め責任をもって推薦できる者が受験する試験）、総合選抜採用試験（合格した場合入校を確約できる者が受験する試験）、一般採用試験（従前と同じ要領の試験）です。細部は、教務部入学試験課（電話番号 046-841-3810（内線 2087、2153）、e-mail: ndanyusi@nda.mod.go.jp）までお問い合わせください。

今後の予定

令和 4 年、いよいよ防衛大学校は設立 70 周年を迎えます。また卒業生の皆

様を防衛大学校へ招聘する行事が3つありコロナ禍ではありますが状況が許せば、①3月の66期生卒業式に22期生（ホーム・カミング・デー）を、②4月の70期生入校式に8期生及び9期生（ホーム・カミング・デー2）を、③11月の開校祭では45期生（ホーム・ビジット・デー）のご帰校を予定しております。

また本年も全国で同窓会の皆様には訓練、部隊実習等で学生がお世話になるかと存じますが、どうぞ明日の国防を担う後輩に対し引き続き温かいご支援を賜りますれば幸いに存じます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

◇新副校長（赤瀬氏）に聞く

「防衛大学校の充実・強化について」

防衛大学校副校長（企画・管理担当）

赤瀬 正洋



本年7月1日付で防衛大学校副校長を拝命いたしました。至らぬ点多々あるかと思いますが、皆様方からご指導を頂きながら、精一杯努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

まずもって、防衛大学校同窓会の皆様方におかれましては、日頃より大変ご理解、ご協力、ご支援を賜っているところでありまして、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げる次第です。

私は、平成元年に防衛庁に入庁しまして、様々な部局、機関などで役人生活を送って参りましたが、防大での勤務は今回が初めてとなります。大変うれしく感じるとともに、身の引き締まる思いでおるところです。

防大については、言うまでもなく、幹部自衛官となるべき者の教育訓練をつかさどる機関です。その任務は極めて明確であるとともに、防衛省・自衛隊にとって、極めて重要な任務を担っていることについては、論を待たないところであるかと思えます。

その一方で、防大がこのような任務をどの程度達成してきているか評価することについては、その特性上、なかなか難しいところがあるようにも思いません。

しかしながら、小原台で学生の姿を見ておりますと、先人のご努力により、素晴らしい歴史と伝統を築かれてきていることを十分に感じることができますし、皆様方卒業生のご活躍により、各種世論調査において、自衛隊が最も信頼できる組織となっていることなどからも、多くの方が、防大は立派にその任務を果たしてきていると考えているのではないのでしょうか。

問題は、防大を取り巻く環境が目まぐるしく変化している中であって、防大が、十分対応できているかということであろうかと思えます。

このような防大の在り方については、昨年度まで、國分前校長の下、「新た

な高みプロジェクト」などによる校内検討が行われてきたところですが、現在は、防衛省として検討を行うため、「防衛大学校の充実・強化に関する調整部会」が立ち上げられ、久保校長が参加して、議論が行われております。

この「調整部会」は、事務次官、統合幕僚長、陸・海・空幕僚長、人事教育局長などがメンバーとなっており、これまでに3回ほど開催されております。

直近の第3回会合においては、「導入」として、防大側から「防大の人材育成の現状と課題」について説明するとともに、各自衛隊からの「防大の人材育成についての評価」、「防大卒業生に期待するもの」などについて示され、議論が行われたところです。

第3回会合は、あくまでも「導入」であり、結論ではありませんし、表現ぶりにも差異はありましたが、総じて、防大において、昭和27年の創立以来、営々と培われてきた基本的な教育方針については、幹部自衛官としての礎を作り上げているという意味において、これまで十分な成果を上げてきているし、決して古びたものではなく、今後も引き続き有効であろうとの評価を得ていたのではないかと思います。

しかしながら、防大の現状について決して良しとするものではなく、「三本柱（教育訓練、学生舎生活、校友会活動）」などについて、様々な、厳しく、有益なご指摘がありましたし、防大に求める人材（資質）についてのご提言などを頂いたところです。

防大卒業生に求める資質としては、極めて概略的に申し上げれば、リーダーシップ、コミュニケーション能力、職業意識（使命感）や責任感、幅広い思考力、発想・思考の柔軟性などについて、今後更に重視すべきであるとのことでした。

また、教育訓練については、新領域など安全保障上の新たな課題への取組、部外との交流の推進、学生舎生活などについては、「自主自律」の実践、適切な学生指導体制・態勢の充実・強化、部外の専門的知見の活用など、様々な課題が示されました。更には、このような課題を実現するためにも、また、大学としての防大の魅力化を図る上でも、生活・教育・研究環境の整備が重要であるとのことご指摘がありました。

このような課題については、社会環境などの変化に起因するところも大きく、他機関も同様のように思いますが、防大については、社会からの入り口として、変化の影響をより大きく受けているように思います。

防大においては、現在、鋭意、具体的な方策などについて検討を行っているところであり、内局、各幕などと緊密に連携を図りながら、来年度までには、「調整部会」として、一定の方向性を出していく予定になっております。

具体的な方策については、必要に応じ、予算要求などを通じ実現されること

となりますが、できる限りに早期に実現するとの観点から、出来るものから進めており、来年度要求においても、第5学生舎の新設、浴場（女子）の増設、部外力を活用したメンタルヘルス対策の強化などが既に盛り込まれております。防大同窓会の皆様方におかれましては、長年の自衛隊での経験を有するのみならず、外からの視点についても併せ持たれているところであり、本件につきましても、様々ご指導等頂ければ大変ありがたいと思っております。

来年度の新入生は70期ですので、30年後の2052年の新入生は100期ということになります。丁度その頃、現在、防大に在学中の学生諸君は、それぞれの組織の重要なポジションにおいて奮闘しているのではないかと思います。

私が30数年前に入庁した頃に比べ、現在の防衛省・自衛隊は随分大きく変わったように感じられますし、今後の変化は、更に大きなものとなるかもしれません。

防大の充実・強化を検討するに当たっては、来年創立70周年を迎える防大の歴史と伝統を守りつつ、変化にしっかりと対応することが必要となるのみならず、30年以上先の将来にも目配りするような長期的な視野が必要なのではないかと改めて感じております。

このような検討の一端に関与できますことを大変嬉しく思っておりますし、微力ではありますが、少しでも防大の充実・強化に貢献することができますよう、全力を尽くしてまいりたいと考えておりますので、引き続き、皆様方のご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇令和3年度水泳大会について

令和3年9月13日（月）、令和3年度水泳競技会が実施されました。

当初、8月30日（月）に予定されていましたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、開催日を2週間延期し、競技会の開催に当たっては、部外者の招待取りやめ、競技関係者のみの競技会場への立ち入り、競技会場内及び周辺における応援禁止並びにそれに代わる競技実施状況の学生舎等への映像配信等、昨年以上に感染防止対策を強化・徹底し実施されました。

当日は好天に恵まれ、絶好の競技会日和となり、団体戦7種目、個人戦6種目が行われました。競技に参加する学生にとっては、無観客の少々寂しい大会となりましたが、それでも学生は日ごろの訓練の成果を発揮すべく、大隊の名譽を賭けて真摯な態度で競技に臨んでいました。

同窓会からは小原台事務局長（北川空将補）が応援に参加し、競技に臨む学生の泳ぎを観戦するとともに、職員レースにおいては、小原台事務局長自らが防衛・教育学群連合チームの第1泳者として参戦し、学生に負けない力強い泳ぎを披露して競技を大きく盛り上げました。

団体戦においては、総合力を発揮した第4大隊が優勝し、準優勝第2大隊、第3位第3大隊、第4位第1大隊の結果となりました。



レースの様子（学生）



学生舎への映像配信



表彰式（学校長から優勝旗授与）

◇第 21 期期生会献花式

第 21 期生会は昨年末に防衛大学校において献花式を実施し、河野克俊会長、荒川龍一郎副会長（陸）、山本高英副会長（海）、小野田治副会長（空）の 4 名が参列しました。

我々 21 期は、令和 2 年 3 月の卒業式にホーム・カミング・デー（HCD）の招待を受けておりましたが、新型コロナ感染症の国内感染にともない 1 年延期となりました。新型コロナ感染症の勢いが収まらない中、実施に向け計画を練っておりましたが、令和 3 年の卒業式も卒業生と在校生のみの参列となり、ホーム・カミング・デーは再延期となってしまいました。

第 21 期生会としては、2 年の延期は後輩期にも影響を与えることから、翌年、令和 4 年 3 月の招待を辞退することといたしました。久しぶりに全国から同期が集う行事を止めることは誠に残念でありましたが、やむを得ないという苦渋の決断でした。

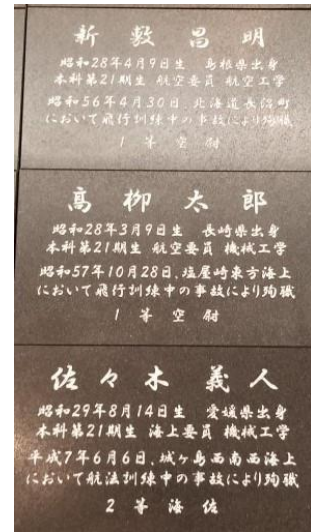
ただ、同期には殉職者が 3 名おり、第 21 期生会として正式に献花式を実施したことがないことから、ホーム・カミング・デーの行事の中で計画していた献花式だけは実施したいとの声があがり、新型コロナ感染症のまん延状況をみて状況が許せる時に、代表者のみで献花式を実施しようということになりました。

実施の機会をうかがっていた中、新型コロナ感染症の第 5 波も収まったのを確認し令和 3 年 12 月 13 日（月）に決行することになりました。少人数の参列ということで、献花式は顕彰碑の前ではなく、資料館 2 階の顕彰室において行いました。顕彰室には 108 柱の殉職者の名前が刻まれており、21 期の新敷昌明君（空）、高柳太郎君（空）、佐々木義人君（海）の銘板の前で、河野会長の献花に合わせ 3 名の副会長が拝礼し、その後、殉職者全員の御霊に対して黙とうを捧げ献花式を終えました。そして、隣の部屋に保管されている遺品を拝見させていただき、彼らの在りし日を偲びご冥福を祈るとともに、残る 21 期生が無事に任務を終え退官できたことに感謝した次第です。

最後に、今回の献花式にあたり防衛大学校のホーム・カミング・デー担当の甘中 2 海佐には大変お世話になりました。ありがとうございました。そして第 21 期生の皆さん、令和 15 年には入校式に招待されるホーム・カミング・デー（HCD2）という事業が計画される予定ですので、お身体を健やかにしてご期待ください。



顕彰室



殉職者銘板



黙とう



献花



参加者一同

(21期生会副会長(海)兼事務局長 山本高英 記)

◆同窓生は今

◇第 65 期生に聞く

「精強な部隊を作る幹部自衛官を目指す」

2021.10.12

陸上自衛隊幹部候補生学校 第3候補生隊第5区隊

一般幹部候補生 陸曹長 池上 智浩



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第102期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校第65期卒業生、応用化学科、自転車競技部の池上智浩です。

私が幹部候補生学校に着校してから早くも5か月が経過しました。幹部候補生学校での生活は防衛大学校より忙しく厳しいものでありますが、その生活も当たり前となり、今では非常に充実した日々を送っています。

とはいうものの、在校生は幹部候補生学校に対して少なからず不安を持っていることと思います。私自身着校するまで幹部候補生学校のことをほとんど知らず、着慣れない制服に袖を通し、不安を胸に幹部候補生学校の門をくぐりました。そこで今回は2つのことについて話したいと思います。本稿が後輩たちの不安の払拭、今後の生活に繋がると幸いです。

1つめは幹部候補生学校はどんな所か、ということについてです。先輩方から聞いている人もいると思いますが、間違いなく幹部候補生学校では防衛大学校の普段の生活より厳しく、忙しい生活が待っています。これは10か月という非常に短い期間の中で我々を指揮官に育て上げるためであります。ですが、防衛大学校における1年生からカッター期間までの厳しさ、忙しさに勝るものはありません。あれ以上のものは今後めったにないと思うので安心してください。

幹部候補生学校では10か月という短い間に5回の試験、高良山走、武装走、100km行軍などイベントが多数存在します。我々には常に目標が付与され、日々自らの成長を感じることができ、非常に充実した生活を送ることができます。また、ここでは一般大、陸曹、陸士、薬学生、体育学校出身の同期も共に生活します。初めは自衛隊の生活に不慣れなため、頼りなく感じることもあるかもしれませんが、是非手を差し伸べてあげてください。彼らの成長速度

はずさまじく、今では防大出身だっけ？と思うほどです。彼らの柔軟な発想、価値観、教養からは日々多くのことを学ばせてもらい、助けられます。もちろん我々防衛大学校出身の者も例外なく成長できます。ここで行われること全ては一貫して「精強な部隊を作る幹部」になるために行われています。目的がはっきりしており、それを皆が認識しているからこそ日々の生活に真剣に向き合うことができます。卒業後幹部自衛官になったとき、精強な部隊を作るために今なにをすべきかと考えると10か月という期間がいかに短いか、感じることを思います。

またここではオン・オフの切り替えも大事になります。やるべき時に十分なパフォーマンスを発揮するためにも、休む時には全力で休み、遊びます。ここ幹部候補生学校の食事は私が今まで行った駐屯地の中でもダントツでおいしいです。外食の必要性を疑うレベルです。また、給料も増えます。防大時代は常に預金残高10万円以下の私でしたが、今ではその10倍はあります。どんなに辛いことがあった日でも、休む時はしっかり休み、おいしいご飯を食べ、湯船に浸かり、通帳を眺めれば乗り越えられます。

2つ目は学生のうちにやっておいたほうがいいことです。私は「挑戦すること」、「初心を忘れないこと」の2点を挙げます。

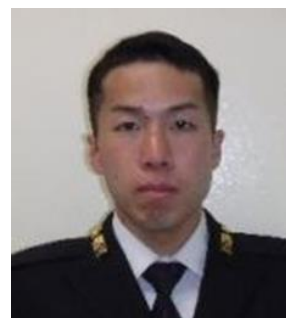
「挑戦」～挑め果敢に～ 成長はいつも、厳しい状況乗り越えた先にあるものです。尻込みしてしまうような厳しい状況にもあえて勇気をもって飛び込んでください。防衛大学校にも数々の挑戦できる機会が用意されています。それは、校友会、海外派遣、サンドハースト、日常生活における些細な場面でも構いません。日々の生活で自らの正義感に則り一歩踏み出し、挑戦するための勇気を培ってください。それが部隊の先頭に立ち、厳しい状況にも積極的に挑む幹部自衛官へと繋がり、ゆくゆくは精強な自衛隊へと繋がるのです。

また、幹部候補生学校では日々の生活に忙殺され、視野が狭まり、自らの使命感を見失うことがあるかもしれません。そんな時こそ自らの初心に立ち返ってみてください。なぜ自衛官になろうと思ったのか、ここで何がしたいのか、何を為したいのか。防衛大学校でも上級生になるにつれ、その熱い思いを忘れ、目的意識を失ってしまいがちです。それを思い出せば今すべきことが自ずと見えてくるはず。その思いがあったからこそ、1年生の地獄の1年間や、カッター期間を乗り越えることができたはず。はずです。

最後に、入校にあたり不安があるのは当たり前です。しかし物事は始まる前が一番思い悩み、始まってしまえばなんとかなるものです。今の防衛大学校での生活を全力で楽しんでください。先に部隊で待っています。

「後輩達へのメッセージ」

2021.10.12



陸上自衛隊幹部候補生学校 第4候補生隊第5区隊

一般幹部候補生 陸曹長 横山 慶次郎

全国の諸先輩方及び同期生の諸官におかれましては、ご多忙の中、日々の任務にてご活躍のこととお慶び申し上げます。陸上自衛隊幹部候補生学校・第102期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校本科65期卒業生、横山候補生です。

去る3月21日、青春時代を過ごした小原台の学び舎に別れを告げ、立派な幹部自衛官になるという目標を胸に久留米、陸上自衛隊幹部候補生学校の門をくぐってから早くも5か月が過ぎました。入校前には本当に自分は幹部候補生としてやっていけるのかと漠然とした不安を抱えていましたが、防大に加え一般大等出身の同期達と常に目の前の課題克服・目標達成のために起床から消灯まで無駄のない時間を過ごす中で不安は払拭されて、心身ともに成長していることを実感しています。幹部候補生学校では実員指揮を重視した戦闘・戦技訓練に加え、戦術や戦史、防衛教養といった幹部として必要な識能教育、また一人の自衛官として自立するために必要な日常起居は勿論のこと、伝統ある高良山登山走、藤山武装障害走等の体育訓練を通して幹部自衛官として必要な資質を涵養することができます。

今回小原台だよりに寄稿する機会を頂きましたので、防大時代と比較して幹部候補生学校の生活で特に意識しなければならなかったことに焦点を当て、後輩達に伝えたいことをこの場をお借りしまして述べさせていただきます。幹部候補生学校への入校を控える後輩達がその生活を想像する上での一助となればと思います。1点目は「自分の考えを持つこと」について、2点目は「計画的に目の前の課題に没頭する」について、3点目は「同期の絆」についてです。

1点目は「自分の考えを持つこと」についてです。防衛大学校に教務班長や訓練班長、長期勤務学生の役職があるのと同じく、幹部候補生学校には半週交代の3役勤務（小隊長、小隊陸曹、学習係）と係業務（同期生会、教務、体育、環境美化係等）といった役職があります。防衛大学校の役職の場合は勤務内容が細分化されているため、やるべきことが明確な場合が多いです。しかし、幹部候補生学校の場合は、区隊毎に多少の差はあると思いますが、多くが3役勤務と係業務の自主裁量に任せられており、指導部の方々から指導を受け

つつ候補生主体で区隊を動かすことができます。むしろ、候補生が主体的にならなければ区隊が動かなくなります。ここで大事になるのが小隊長や係業務の長が区隊を掌握し、状況を判断した上で今何をさせなければならないのかという自分の考えを持ち、それを列員に明示することです。幹部候補生学校では区隊指導部に模範とすべき方々がいます。そういった方々が実際にどのような思考過程で物事を考えているか学びとる姿勢を持って、自身の企図を確立する上での精度を高めるよう努めてみてください。幹部候補生学校での生活を有意義にするということに収まらず、今後の自衛官生活において必ず役立つと私は考えています。

2点目は「計画的に目の前の課題に没頭する」についてです。防衛大学校の生活は上級生になれば時間に余裕が生まれ、そのあり余った時間で何かに集中して取り組めば自ずと何かしらの成果が得られる環境だと思います。しかし、幹部候補生学校の場合はやるべきことが多く、中々自分の時間を確保することができません。ただ一生懸命に目の前のことに取り組んでいたとしても、忙殺されてしまったり、忙しさに埋もれて目標を見失ったりして何の成果も得られないということが起きてしまいます。こういった現象を防ぐためにも、長期的な視点で計画的に目の前の課題に集中する必要があります。常に自分が持っている時間を何に傾注すべきか長期的な視点で優先順位を定め、決めたことに集中して取り組むことが大事です。こうすることで必要以上に休んだり、だらけてしまいたくなる自分を律することができます。

3点目は「同期の絆」についてです。同期がいかに大事な存在であるのかは、防大生の誰もが1学年時から身に染みて心得ているものだと思います。敢えてここで取り上げるほどの項目ではないという人もいるかもしれませんが、幹部候補生学校における「同期の絆」は明らかに防大時代の同期との関係性とは異なると考えています。幹部候補生学校では常に時間に追われ、毎日のように体力練成で身体を限界まで追い込むため、自分に余裕をもって生活できるような甘い環境ではありません。このような環境で生活していると自分のことばかりを優先する個人主義に陥ったり、同期に対して強く当たってしまうような場面がよくあります。しかし、真に同期の絆を育むためには、このように困難を共有しながら自分自身の本性をさらけ出して、お互いを理解するという過程は必要不可欠です。同期の弱みや強みを知っているからこそ、本当に過酷な局面で自分なりに同期を支えたり、逆に助けてもらうことができるものです。腹を割って本音で語り合い、時に励まし合い、時に厳しい言葉をかけるという過程を経てこそ真に背中を預けられるような同期との絆が形成されます。ここ幹部候補生学校はこのような濃密な人間関係を学ぶことができる環境でもあります。

上記3点を幹部候補生学校の入校を控える防大の後輩達へ伝えたいこととして述べさせていただきました。私の経験が少しでもお役に立てれば幸いです。しかしながら、私もまだまだ未熟者ですので、今一度、態度を見つめ直し、自分の目指す幹部自衛官像に少しでも近づけるように残りの期間も貪欲に成長できる機会を求めて精進して参ります。

「後輩へのメッセージ」

2021.10.12

海上自衛隊幹部候補生学校
第72期一般幹部候補生課程第1分隊

一般幹部候補生 海曹長 坂東 涉伍



はじめに

3月28日に期待と不安を胸に抱え、海上自衛隊幹部候補生学校（以下、候校）の門をくぐってから早くも半年が過ぎようとしています。様々な訓練や競技会を経験し、候校での生活にも少しずつ慣れ始めました。この度、「小原台だより」を通じて、後輩へメッセージを送る機会を与えて下さった防衛大学校同窓会の皆様には心から感謝を申し上げます。第72期一般幹部候補生課程を代表し、坂東候補生（第65期、航空宇宙工学科、ボート部、愛媛県出身）が後輩へのメッセージとして、「幹部候補生のあるべき姿」、「同期から学ぶこと」、「防大でやるべきこと」の3点について述べさせていただきます。

幹部候補生のあるべき姿

幹部候補生には自主自律、自啓自発の姿勢が求められており、その実践の場として、役員、週番、当直、競技会、各種実習等があります。例えば、競技会においては他分隊に勝つための作戦を学生が考案し、それを実現するための効果的な訓練を学生が計画します。その他にも規律の乱れ等、改善すべき事項があれば学生が改善策を考え行動しています。

私は、これらの機会を通じて自主自律、自啓自発を追求することが幹部候補生のあるべき姿であると考えます。我々に求められていることは、幹部自衛官に必要な基礎的知識を身につけることだけではありません。幹部自衛官に必要なリーダーシップ、シーマンシップや自衛官の心がまえを体得するために自主自律、自啓自発を発揮することが不可欠です。

この幹部候補生のあるべき姿は、防大生のあるべき姿に通じるものがあると思います。防大では、知・徳・体の3本柱を身につけるために、教育訓練、学生舎生活、校友会があり、学生主体で考えて行動することが求められます。それらの活動を通じて学んだことは、候校においても、そして将来幹部自衛官になった時に必ず役に立つと考えます。同期から学ぶこと 候校には、防大卒の候補生（Ⅰ課程）の他にも、一般大学卒（相当含む。）の候補生（Ⅱ課程）や防衛医大卒・一般大学歯学部卒の医科歯科看護科幹部候補生課程、海曹長になるまで勤務して入校する幹部予定者課程、部隊で数年勤務してから入校する一般幹部候補生課程（部内課程）、飛行幹部候補生課程、そして公募幹部課程が

入校します。

私は、候校で他課程出身の候補生との交流を通じて、自らの見聞を広め、多様な価値観に触れる機会を得ました。例えば、一般大学卒の同期の考え方やこれまでの経験は、防大で4年間を過ごし、考え方が自衛隊一色に染まっている私たちに新しい視座を与えてくれます。医科歯科看護科幹部候補生課程の同期とは交流を通じて、今後の医官のキャリアや医官としての志を知る良い機会になりました。また、部隊経験がある幹部予定者課程や部内課程の候補生との話では、海曹士はどのような幹部に指揮されたいかということや、部隊で彼らがどのような考えをもって勤務していたかを知ることができます。このように、候校では自分とは違う考え方や価値観を他課程の同期から学ぶことができます。

防大でやるべきこと

最後に、防大でやるべきことについて私の考えを述べようと思います。それは、自分の理想の幹部自衛官像を持つこと、そして同期や指導官との関わりを大切にすることです。防大では、学年が上がるごとに授業数や上級生からの指導は減るため、目標なく生活している学生の生活は楽なものになりがちです。しかし、楽な状況へと流されるのではなく、常に理想の幹部自衛官になるために必要なことを考え、行動してください。先に述べたように、防大には教育訓練、学生舎生活、校友会において学生主体で考えて行動することが求められます。これらを行うことは難しく、失敗もあるとは思いますが、学べることも多くあります。目標なく過ごす者と、目標に向けて努力する者とは卒業時に大きな差ができます。常に自分は何をすべきなのかを考えて日々を過ごしてください。

また、陸空要員の同期と積極的に関わってください。これからの自衛隊は、現在以上に統合運用を進めていくと思います。陸海空の考え方の違いを知り、理解しておくことは、将来自分が幹部自衛官となり、統合運用で任務を遂行する際に、必ず役に立つものと考えます。海上要員のみならず、陸空要員の同期とも絆を深めてください。

おわりに

これまで述べてきたように、防大では多くのことを学ぶことができます。しかし、それらは自分から学びにいかなければ身につけることができないものばかりです。墮落した生活を過ごして後悔を胸に卒業するか、目標をもって生活して自らの成長を実感し、胸を張って卒業できるかは君たち次第です。立派な幹部自衛官を目指してお互い頑張りましょう。部隊で会うのを楽しみにしています。

「幹部候補生学校の生活で得られたこと」

2021.10.12

航空自衛隊幹部候補生学校 第3中隊 第1区隊

一般幹部候補生 空曹長 池田 真郷



この度、防衛大学校第65期卒業生代表として、同窓会の機関紙に寄稿する機会を頂きました池田候補生と申します。拙い文章ではありますが、「幹部候補生学校の生活で得られたこと」について述べさせていただきます。まず初めに、我々の学び舎である航空自衛隊幹部候補生学校（奈良基地）が、どのような環境にあるのかについて少し紹介したいと思います。幹部候補生学校は、東を宇和奈辺古墳、西を小奈辺古墳に囲まれ、さらに学校内にも古墳が点在するという特殊な立地です。また、奈良の大仏で有名な東大寺や、国宝五重塔を見ることが出来る興福寺なども程近くにあり、歴史豊かな古都奈良の中心部に位置しており、歴史を常に肌で感じられる環境です。

さて今回はこの「小原台だより」に寄稿する機会を頂きましたので、幹部候補生学校に入校して5か月が過ぎようとしている今、この素晴らしい環境に恵まれた地で学び得たこと、感じ取ったことを5点述べさせていただきます。

1点目は一期一会の精神です。幹部候補生学校には我々防大出身者と一般大出身者から構成されるBU課程だけでなく、空曹として勤務した後に入校するI課程や、航空学生出身者であるA課程、防衛医大出身者などのMDN課程、事務官として採用されたCE講習など、さまざまな課程が入校します。これらの課程の同期たちはお互いに異なる経験をしており、交流を図ることで新しい人間関係を築くことができるだけでなく、自分たちにはない視点をすることもできます。しかし、それぞれの課程は異なる時期に入校し、各々の課程を履修し、異なる時期に卒業するため、交流の期間、機会は決して多くはありません。そのため、貴重な機会を無駄にすることなく、有効的、かつ、積極的に交流することが重要となります。一方、防大はあまり人の入れ替わりがなかったため、私はこのような短期間で人間関係を築くことに慣れておらず、今までに入校し、卒業した他課程と十分交流できたとは言えません。そこで私は、人との別れは一瞬で訪れることを悟り、一回一回の人との交流の機会を大事にしていきたいと感じました。

2点目は日本の歴史を肌で学ぶことです。冒頭で述べたように、奈良には神社や仏閣、古墳などをはじめ、教科書に掲載されているような歴史的な名所が

数多く所在しています。この歴史的な名所を訪れ、五感でその場所を感じることで、気持ちが安らぐとともに、日本という国に対する自然な愛着が湧いてくると考えます。この愛着は日本人としての帰属心にも結び付き、事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に努める自衛官にとって大きな支えとなると感じます。

3点目はオープンマインドの維持です。このことは区隊長たちから学んだことです。言葉にするのははばかりですが、私は幹部候補生学校に入校する前、区隊長という存在は、学生にとって恐怖の対象でしかないと考えていました。しかし、入校して区隊長との交流をもつようになると、区隊長は基本的にはオープンマインドであり、厳しいご指導をすることが常ではないということがわかり、ほっとしたことを覚えています。オープンマインドは、ナポレオンが「凶報ならばすぐに起こして伝えよ」と言ったと伝えられているように、任務遂行上影響が生じる悪い情報等の収集を容易にするため、自身の考えや方針といった自分自身をさらけ出す意味で用いられます。この考え方は、指揮官の意思決定において、階級に関係なく、あらゆる隊員が持つ多種多様なアイデアを吸い上げ、より適切な指揮を行うために重要であり、多種多様な任務を遂行する自衛隊にとっても重要であるといえます。そのため、私もナポレオンのような区隊長たちを見習い、厳しくも話しかけやすい幹部自衛官になりたいと考えます。

4点目は日々の生活を楽しむことです。これは幹部候補生学校学生隊長の要望事項である、明朗快活から学んだことです。前向きな思考になればなるほど脳の働きが活性化し、後ろ向きな思考になればなるほど、脳の働きが鈍くなるということが心理学の実験で明らかになっています。つまり日々の生活を楽しむことは、重要な場面での正しい判断や、独創的な判断を可能にするということです。しかし、生活を楽しむためには、日々の楽しくないこと、例えば入室要領で指導される、駅伝競技会で多くの人に抜かされるといったことを減らす必要があります。そのため、私はこのような楽しくないことを減らすため、訓練や基本教練に全力で取り組むとともに、前向きな思考をするよう日々心掛けています。

5点目は改善意欲をもつことです。今まで私は、幹部候補生学校で当直勤務の経験を約1か月に1回の頻度で経験しました。当直勤務では課業行進で指揮官として部隊を率いることや業間訓練（朝礼）を企画し実施することがあり、その際に区隊長から指導を頂くことがあります。当直は約3日で下番するため、この際指導された事項は、次の当直上番時に改善するということが多いです。この当直勤務を通じて、前回の反省を忘れずに改善することはもちろん、もし区隊長から指導を受けなかったとしても、もっと良くできる部分はないだ

ろうか、もっと効率的な勤務はできないだろうかと常に考えることが、自身の成長に大きくつながることを学びました。

終わりに、現在、課程履修期間は半分しか経過していませんが、私はこれまでの幹部候補生学校での生活で、上記の事項以外にも多くのことを学び、感じ取ることができました。これからの課程履修期間も多くのことを学ぶべく、積極進取の姿勢で取り組んでゆく所存です。

◇今人生、真っ盛り（27期生）

「人生のドットを結ぶ」



吉田 賢一郎（27期 陸上）

防大を卒業して40年弱、突然の寄稿依頼に初めは躊躇ったものの、自らの人生を振り返るよい機会を頂いたと今はとても感謝しています。実はすっかり忘れていましたが、1学年時に「小原台だより」に寄稿したことを思い出しました。恥ずかしながら当時、国の防衛に対する考え方が、入校してたった数カ月で変わったことに自分自身でも驚いたことを綴った覚えがあります。しかし、それから自衛官として過ごした長い年月は、更に自分の人生に対する考え方（価値観や判断基準）や生き方までも変え、そして今、自衛隊を退職した自分がここにあるのだと改めて噛みしめています。

振り返ってみると現役時代から、仕事は単に成功する事だけではなく、その意味がとても重要であり、「何のために」を常に考えることが自然と身に付いていたように思います。自分のため、家族のため、仲間のため、組織のため、社会のため、国のためにと順番に考えますが、いつのまにかそれがひっくり返って、考え方の根底の一番最初に国や社会のために如何にすべきかを考えるようになっていました。少しきれいごとのように聞こえますが、我が家の家訓を「努力・感謝そして貢献」と決め、子供たちにも幼いころからそう教えてきました。

5年前に自衛隊勤務を終えて一般企業に再就職しました。特にこれといった希望もなく、援護マンから勧められるままに従業員数100名にも満たない中小企業の重職として入社しました。しかし経営者と事ある毎に議論して感じたことは、企業営利だけを優先するその根底にある、ものの考え方が、自分がこれまで思っていた「何のために」からは随分とかけ離れていたことです。意気揚々と再就職はしたものの、本当に自分は国や社会のために役に立っているのかと考え始めるようになりました。つまり自分の人生に対する考え方や生き方に正直でなかったことに改めて気付いたわけです。結局、その会社は2年務めて退職しました。いろいろな意味で良い勉強にはなりました。そして今度は本当に自分の気持ちに素直になって、社会に貢献できる、あるいは自衛官時代に

は叶わなかった国際貢献活動などにも従事したいと思いました。

それから再々就活で出会ったのが、今いる社団法人です。元自衛官からなる内閣府の事業団のうちの一社です。ご存じない方もいるかもしれませんが、我が国は戦後70年以上経った今も、化学兵器禁止条約（CWC）に基づき、旧日本軍が中国本土に残置した化学兵器（毒ガス弾など）の処理を政府全体で取り組んでいます。平成11（1999）年には、遺棄化学兵器処理担当室が内閣府に設置され、平成12（2000）年9月黒龍江省北安市において、最初の小規模発掘・回収事業を実施しています。それ以来、これまで約20年間にわたって中国各地から約6.3万発（平成30（2018）年3月末現在）の遺棄化学兵器を発掘・回収し保管してきました。

中国国内に遺棄された化学兵器の全体像は、北部の黒龍江省から南部の広東省までの広範囲で確認されています。特に、吉林省敦化（とんか）市ハルバ嶺（れい）には、約30～40万発にのぼる化学兵器が遺棄されているものと推定されており、現在同地区での本格的・大規模な発掘・回収、処理事業が進められていますが、全てを終了するまでにはまだ暫くかかるようです。防衛省・自衛隊も遺棄化学兵器処理担当室に、平成11年より職員を出向させて、その取り組みに参加しています。

私が主に従事しているハルバ嶺事業は規模も大きく最もシンボリックな事業です。それは敦化市街から約40キロ離れた軍管理施設下であり、全貌はまるで大きなプラント工場のような感じです。二つある発掘坑は学校プールほどの大きさがあり、全体を覆う屋内作業場が設置され、換気装置も装備された気密性・安全性が高いものになっています。この中で防護マスクを装着し、分厚い化学防護衣を身にまとい、危険な化学兵器を手で一つ一つ慎重に掘り出し、廃棄処理していくわけです。長年にわたり遺棄されていたことで表面が劣化し、毒ガスが漏れ出していることもあり、常に危険と背中合わせの作業です。まさに安全第一に、やるべきことを粛々とやれる元自衛官（陸海空幹部）だからこそできる特殊専門的な事業です。

昨年はコロナ旋風が吹き荒れて海外事業はできませんでしたが、2021年度4月から渡航制限などはあるものの事業は少しずつ再開しています。退職してから一度は横道に逸れましたが、今は日本の代表として最前線に立って、現場作業に参加して汗をかいています。そして後世に負の遺産を残さない軍備管理の取り組みの一助となっていることを誇りに思い、また人生に対する考え方や生き方を現役時代と同じ思いから、今に繋げられたこと（人生のドットを結んだこと）に喜びと生きがいを感じています。あと何年生きられるかなあと思うようなそんな年頃になりましたが、できれば自分の死の向こう側にまでも貫く生き方のドットを打つ、そしてそのドットにはどんな意味を持たせるかが、次の

新たな課題であり楽しみにもなっています。今人生、男盛り？ではなく常に人生真っ盛り、終わりなく人生のドットを結び続けたいと思っています。終活なんかクソくらえ、まだまだこれからも我が道は続くと思うとやる気も沸いてくるというものです(笑)



2021.6 吉林省ハルバ嶺発掘・回収事業



日中相互協力による回収作業風景
(内閣府提供)



中国入国後の4週間隔離、PCR・抗体
検査約5回



事業の合間、研修で旅順二百三高地
に

「大学にて思うこと」



吉富 望（27期 陸上）

「今人生、真っ盛り」とは、心身ともに充実し、最も活力の旺盛な時期を意味すると思います。この意味では、私の「真っ盛り」の時期は、陸上自衛隊の野戦特科部隊の大隊長や連隊長として、隊員と共に部隊の精強化に向けて頑張っていた頃だと思えます。したがって、「今人生、真っ盛り」かと聞かれたら、もう過ぎたと答えざるを得ません。ただし、6年前に陸上自衛隊を退官した後の時期に限って言えば、一般大学の教員として防衛大学校や自衛隊とは異なる環境に身を置き、試行錯誤を重ねつつ、それなりの充実感をもって過ごしている今は、人生の第二の「真っ盛り」だと思えます。ここでは、大学の教員として最近思うことを書いてみます。

コロナ禍を通じて見る大学の一面

新型コロナウイルス感染症が2020年3月頃から猛威を振るい始めると、大学は4月からの新学期における授業の方法を模索し、ほとんどの大学がオンライン授業を始めました。しかし、授業開始時期は大学によって4月から5月中旬頃とばらつきがあったようです。つまり、一カ月以上にわたって授業を全く行わないケースもあったこととなります。学生から高額授業料等を徴収し、国から多額の補助金を交付されている大学にとって、教育を行うことは社会的な責任ですが、コロナ禍という突発事態下とはいえ、大学はその責任を果たせたと言えるでしょうか。

東日本大震災以降、政府は企業に対して災害等の危機時における事業継続計画（BCP）の作成を推奨してきましたが、2021年5月に帝国データバンクが行った調査では、BCP策定率は17.6パーセントに留まっています。一方、大学では東日本大震災以降、災害等の危機時における国、自治体、企業などの対応について様々な研究が盛んに行なわれ、BCPも研究対象の一つでした。しかし、危機時においても教育を継続するためのBCPを定めている大学は多くありません。正確な策定率は不明ですが、企業のそれよりも低いことは確実だと思います。

その第一の原因は、教員による研究が学校運営に反映されにくい大学の体質です。研究は教員が行い、学校運営は主として職員が行うといった大学内の役

割分担が両者の融合を難しくしている場合があります。また、研究に専念したいので学校運営には関わりたくないとの教員の意向も垣間見えます。第二の原因は、正常化バイアスです。研究の結果としてBCPの必要性を認識していても、「なんとかなる」と考えて策定を怠ってしまうのです。この傾向は、大学に限ったことではありませんが・・・。

感染状況が落ち着いてきた今、大学ではコロナ以前の状態に戻そうとする意識が強いように感じます。しかし、“Build back better”と言われるように、コロナ禍の教訓を無駄にせず、次の危機に直面しても教育を継続できる大学へと進化させることが重要ではないでしょうか。これは、防衛大学校にとっても他人事ではないと思います。

大学生と日本の防衛

「日本を守っているのは米軍」、「自衛隊の仕事は災害派遣」、「とにかく戦うことはダメ」・・・大学で『防衛政策』という科目を担当してきた4年間で何度も聞いた学生の言葉です。でも、これを責めることはできないと思います。なぜなら、ほとんどの学生たちは生まれて以来、学校でも家庭でも防衛について考えることも教えられることなく過ごし、修学旅行で訪れた沖縄や広島で聞いた話や、たまたま目にしたテレビの画面やSNSの情報だけで防衛に対するイメージを作っているからです。そんな学生たちにとって、私が『防衛政策』で教えている日本周辺や世界の軍事情勢、日本の安全保障・防衛政策の変遷、自衛隊の諸活動などは、初めて聞く話のようです。もちろん、防衛に対する自分のイメージに固執する学生もいますが、意外にも多くの学生が（程度の差はあるものの）比較的柔軟で、授業を通じて防衛に対する新たなイメージを持つに至っていると感じます。そして、数は多くありませんが、自衛官を目指す学生もいます。私の所属する学部からも毎年、幹部候補生学校と曹候補生に入校・入隊しています。自衛官を目指す学生たちは、自ら防衛に対する意識を高め、地方協力本部と連絡を取り、筆記試験と面接の準備に取り組みます。しかし、試験に合格する保証は無いので、企業などへの就職活動も同時に進める必要もあります。現在の就職戦線は決して氷河期ではありませんが、中途半端な準備で希望する進路に進めるほど甘くありません。このため、自衛官を目指す学生たちの就職準備の負担は大きくなります。また、経済的な理由でアルバイトに時間を費やさざるを得ない学生もいます。

こうした厳しさは、自動的に幹部候補生学校に進む防衛大学校の学生には体験できないものです。防衛大学校の学生諸官は、卒業したら是非とも一般大学卒の自衛官と話をして彼ら、彼女らの経験から学び、多様性への認識を深めて欲しいと願っています。

「人生は何が起きるか分からない。だから面白い。」



大塚 海夫（27期 海上）

小学生の頃から「海軍士官」になりたかった。防大に入ってから40年間、自衛隊で過ごせたことを誇りに思っており、一点の悔いもない。父親が貿易会社を営んでいたのので、我が家では、海外に出ることと、定年がないことが「当たり前」だった。だから、退官したときには、まだまだ長い人生、どうやって日本と海外を繋ぐことを生業にしようかと楽しみだった。

日本と英国のシンクタンクのメンバーになるご縁を頂戴した。国内中心だが、シニアコンシェルジュというこれからの時代に求められる事業を起こした若い起業家のお手伝いをし、自衛官時代から強い関心を抱いていたAI企業のアドバイスもした。そのうち、商社からお声がかかり参与として勤務することになった。民間で海を渡る、と思った途端、ジブチ大使の話が天から降ってきた。これには正直、驚いた。元自衛官大使の前例はなかった。そもそも大使のオファーがあるとすれば、我が家において、それは家内に来るべき話だ。とはいえ、祖国に奉仕できることは無上の喜びであり、謹んでお受けした。

国と大陸は異なるが、家内も同時の認証式で揃って陛下の御前に進むという前代未聞の榮譽にも預かった。子供の頃から、日本を愛することにかけては人後に落ちない自負はあったが、実際に特命全権大使を拝命して、日本を代表する立場になると、その任の重さに、「身の引き締まる思い」とはこういうことかと実感した。

自衛隊将官時代には、海外から国際会議等への招待を受けて出かける機会がかなり多かった。当時の海幕副長から「お前はいつも先進国でいいよな。俺は途上国専門だからな」と冗談を言われたが、その自分が、いつの間にかアフリカに住むことになった。かつて、自衛隊が海賊対処活動を開始した段階で、ジブチに海将補のポストを置く計画が練られ、内局も担いでくれ、私とその任を負うことになっていた。しかし、与野党逆転し、省改革計画がご破算となってジブチ赴任も消えた。それが12年後に、同地に大使として赴任することになった。人生何が起きるか分からない。



ゲレ大統領に信任状を奉呈



文化外交を支える元2等海佐
山下勝巳公邸料理人

ジブチは不思議で魅力的な国だ。四国の1.3倍程の面積に百万の人口、天然資源はほぼ無い国ながら、バベルマンデブ海峡という海運の要衝を扼し、アフリカにありながら、旧宗主国のフランス語と共にアラビア語を公用語とするイスラム教国としてアラブの色彩が強く、ソマリアやイエメンという崩壊した国家に隣接するとともに、百倍以上の人口を持ち、騒乱に揺れる内陸国エチオピアの外港としての役割を果たしている。そして何より注目すべきは、仏、米、伊、日、中という五か国の基地をホストし、スペインを加えた6か国の軍隊が常時プレゼンスを置いていることだ。

ジブチは「アフリカの角」地域で唯一安定を享受する国家であり、国内の治安も極めてよい。夜中でも女性が一人で問題なく歩ける国は世界にそうは無い。これらの事実だけでも、国際関係の学徒にとっては、興味尽きない対象だと思う。

自衛隊は海賊対処のためジブチに拠点を置き哨戒機を運用すると共に、艦艇の主要補給地としてジブチにプレゼンスを示している。世界の海上交通の安全を確保するための行動は、世界経済の安定を支えるとともに、港湾ビジネスに国の繁栄を依拠するジブチの安全保障にも寄与している。日本は、44年前のジブチ独立以来、インフラ、治安、交通、教育、保健衛生、農業、人材育成など、幅広い分野で、国民の草の根レベルにまで裨益する援助を行い、ジブチが「内戦」状態にあった辛い時期も継続的に支援を続けてきた。援助総額は五百億米ドルにもものぼる。日本に対するジブチ政府と国民の評価は極めて高い。

ジブチは世界一暑い国といわれ、夏の屋外温度計は50度を超える。衛生状態、医療体制は日本と比肩すべくもなく、シャワーを浴びても塩からい水が降り注ぎ、この国に居を構えるとなると苦労は相当なものである。その一方、ジ

ブチ人は人が好い。誇り高い人々で、狡すっからい国民ではない。市内で物乞いをしているのは周辺国難民で、ジブチ人は相互に助け合う。だから、失業率が相当高くても、親戚家族がセイフティネットになっていて治安が保たれる。もちろん、日本的正確さを基準にするのは的外れだが、この国の人々と付き合うのはストレスが少なく、実に気分がいい。この国に来てようやく一年。生活環境、職場の文化など、最初はやっていけるか不安に思った。しかし、あっという間に、この国にかなり惚れた。



日本供与の警備艇ダメルジョグにてワイス沿岸警備隊長官と
日本援助による国道1号線補修工事完了式

ここ数年、つくづく「うえ」に気を遣って生きて行くことが大事だと感じるようになった。運の「う」と縁の「え」だ。縁を大切にすると運も拓けてくる。人生60年の縁がジブチ勤務という運をもたらした。ジブチでの今日の縁が、どのような明日の運に繋がるか楽しみだ。人生はまだまだ続く。次は何が起きるか分からない。だから人生は面白い。

「人生真っ盛りへの道」



廣兼 利伸（27期 航空）

平均的な同期の皆さんは、自衛隊を定年退官し、「第2の人生、真っ盛り」という心境の方が多くはないかと思います。39歳で退官し、父親の建設会社を継いだ私にとっては39歳から50代半ばまでが「第2の人生」で、今は「第3の人生、真っ盛り」といった心境です。今回寄稿の機会を頂きましたので多くの皆さんとは一味違う真っ盛りへの道と近況をお話ししようと思います。

1 第2の人生

空幕広報室を最後に39歳で退官した私は、父親が社長を務める土木会社を継ぐべく郷里の山口県岩国市に帰りました。父親は職人気質の人で、現場にいれば満足という人でした。腕と度胸で仕事をこなしていたため、売り上げと利益が不安定な状況でした。私が帰った時の負債は4000万円あり、これを返済していくことと入札への参加が当面の課題でした。周囲の助けもあり、6年目に小さいながらも入札で公共工事を受注することができるようになり、7年目には負債を全て返済し、12年目には公共工事を中心に1億円の売り上げを記録するまで会社を成長させることが出来ました。



土木工事業時代（平瀬ダム建設現場）

人生何が起こるかわからないものです。喜んでいたのもつかの間、この年の8月、家内が若年性アルツハイマー病と診断されました。当初は軽い物忘れと意欲の減退程度だったので高をくくっていたら、翌年には子供のお弁当が作れなくなり、診断から2年で「要介護1」、4年で「要介護2」、5年で「要介護3」と認定されました。この頃になると介護の負担が増え、会社経営と介護の両立が難しくなり、土木業からの撤退を決めました。その後は急速に症状が進み、7年目で「要介護5」になるまでの2年間は、てんかん発作、徘徊、弄便など様々な認知症状が現れ、オムツ交換の時に噛みつかれるなど、なかなかスリリングな毎日を過ごしました。問題行動等が原因で介護サービスが受けられなくなったことから入院を決め、以来家内は6年半に亘る入院生活を送ることとなりました。入院後はほぼ毎日、往復2時間かけて昼食の食事介助と洗濯物の交換に通っていたので、ほぼ無収入の時期がしばらく続きました。そんな折、子供の勉強を見てほしいという依頼があり、知り合いの子供さんの勉強を夜の時間に見ていると、二人三人と生徒さんが増え、勉強を教えることで何とか生計が成り立つようになりました。家内が入院して介護の負担は減ったのですが、今度は病院からの電話が鳴るたびにドキドキさせられる日々が待ちました。発熱、嘔吐、てんかん発作、誤嚥。最初は軽度でしたが段々と深刻になり、何度も危ないかも？という状態に陥りました。

2 第3の人生

精神的にも肉体的にも弱っていた時期、陸の鈴木正次郎君たちが志賀高原にスキーに誘ってくれたのが転機となり、もう一度積極的に自分の人生を切り開く意欲が戻ってきました。平成30年からは、30年ぶりにスキーを再開し、それ以降毎シーズン60日以上ゲレンデに出ています。令和元年には家内と行く予定だったヨーロッパを家内無しでしたが2週間かけて旅行してきました。



志賀高原スキー場



マッターホルンを背景に

令和2年からは、35歳で始めたテニスに本格的に取り組み、年間150日以上テニスコートに立っています。熱心な練習の成果が認められ、令和2年・3年と山口県テニス大会の岩国市代表チームのメンバーに選んで頂きました。



防大同窓会テニス大会

そうしている間にも家内の病気は進行し、いよいよ最期が近づいたため、家族で最期の時間を一緒に過ごすことを決断しました。思い悩んだ挙句の決断でしたが、お陰で令和3年9月27日に退院し10月2日に穏やかに息を引き取るまで、仕事を休ませた娘たちと学校を休ませた孫たちと一緒に、家内を含めた家族8人で、自宅での濃い6日間を過ごすことが出来ました。

そんな時期にこの原稿の依頼があったのも、「まだまだ老け込むには早い！」という同期からの有難い激励であったと感謝しています。

現在では学習塾の生徒さんも増えて、小学校4年生から高校3年生まで20数名の子供さんの勉強を見えています。個人指導にこだわっているため、これ以上生徒さんを受け入れられないのが悩みの種です。受験がうまくゆけば、今年度は京都大学と北海道大学に一人ずつ合格していることと思います。

地域に貢献するため、帰郷後すぐに入団した岩国市消防団（団員定数1685名）では副団長を拝命しています。令和3年に総務省消防庁から発出された通知を受け全国的に団員の処遇改善が進められていますが、人件費だけで1億円以上の予算が必要な我が市の消防団としては、なかなか簡単には物事が進まず、落ち着くまでには数年が必要になるかと考えています。幹部の定年は70歳ですので、もうしばらく後進のために尽力したいと思います。

3 男盛り

地元にいる高校の後輩が誘ってくれたので、空の深瀬尚久君と第2術科学校（浜松基地）時代にコンサートを行って以来となるフォークのバンド活動も再開しました。これを含めると、現在の主な活動は、「個人指導の学習塾」「消防団」「テニス」「スキー」「フォークバンド」となります。

確かに今までの人生でこれほど幅広く活動していた時期は無かったなと改めて感じました。人生真っ盛りのパワーの源は何かと問われるならば、私の場合それは「チャレンジ精神」です。また、それぞれの活動が継続できているのは、努力に対して「リターン」をしっかりと頂いているからだと思います。この寄稿もチャレンジの一つとしてお受けしました。

これからも「来る者は拒まず」の精神で、いろいろなことにチャレンジし、出来れば人生最後の日まで「相変わらず廣兼は人生真っ盛りだねえ」と言われる日々を過ごしたいと思います。



消防出初式

◆活動報告

◇令和3年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

2022. 3. 25

同窓会は、新型コロナウイルスの新変異株「オミクロン株」の感染急拡大を受け、令和3年度代議員会を不測の事態時の処置として中止し、昨年同様に防衛大学校同窓会会則に係わらず「書面による決議」へと移行させて頂きました。

以下、その概要等について報告します。

1 全般

代議員会で審議予定であった下記4つの議決事項について返信はがきによる回答での議決を行った結果、過半数の賛成の返信を賜り、それぞれの議案についてご承認いただきました。

第1号議案 会則改正（代議員会、理事会）

第2号議案 令和2年度同窓会事業報告・会計決算報告・会計監査報告

第3号議案 令和4年度同窓会事業計画（案）・事業予算（案）

第4号議案 令和4年度同窓会役員を選出

なお、代議員の皆様から頂戴しました意見やご質問に対しましては、事務局より個別にメール等により回答させていただきます。

2 会則改正について

令和元年度～令和3年度の代議員会における議案につきましては、新型コロナウイルス感染症の蔓延の状況からやむを得ざる処置として、書面による決議とさせていただきます。

今後の「新しい生活様式」に合わせた同窓会の会務運営のため、代議員会及び理事会への出席についてはWebでの出席も認める等の会則を改正させていただきます。

3 令和4年度同窓会事業計画・予算

（1）事業計画の方針

同窓会は、母校の充実・発展に積極的に寄与するとともに、会員相互の親睦・交流、社会活動への寄与を重視して着実に事業を推進してまいります。この際、防衛大学校の国際交流及び受入留学生・受入国の拡大に伴う国際交流支援業務の充実を図るとともに、期生会・地域支部（海外支部含

む)等の活性化を促進しつつ会務運営基盤の充実とWeb会議システム等の活用による業務の一層の効率化に留意いたします。

(2) 会員相互の親睦・交流事業実施の考え方

会員相互の親睦・交流事業のうち、各種競技会につきましては下記の通り計画しております。

なお、緊急事態宣言等が発令された地域での実施は、政府・自治体の要請及び防衛省・自衛隊の状況等を踏まえ総合的に判断してまいります。

各種競技会	実施日
囲碁大会	9月3日(土)
ゴルフ・レギュラー大会	9月9日(金)
ゴルフ・シニア大会	9月16日(金)
テニス大会	10月11日(火) (予備10月17日(月))

(3) 会費の低納入率が継続する場合の下半期事業実施の考え方

年度事業計画におきましては、事業の効率化・経費節減を図った上で、必要な事業を計画しております。しかしながら会費の納入率が低い状況もあり、現在、在学間における会費積立について学生と調整中(細部下記「お知らせ」で記述)です。令和4年度においても大幅に収入が減った場合には、下半期の母校支援以外の事業について実施要領を変更する場合がありますのでご了承下さい。

4 同窓会本部からのお知らせ

代議員会で報告を予定しておりました件を含め、3点お知らせいたします。

(1) 会費徴収要領の変更及び細則の改正

現在、同窓会費は、防衛大学校卒業後の幹部候補生学校の在学中に夏の賞与の機会に一括納入をお願いしています。しかし、一括納入の負担感等から期により納入率に大きな変動が見られます。このため、金銭的負担感を軽減し確実な納入を促進するため、防衛大学校在学中に積立て、卒業時に一括して納入ができるよう防大及び該当期と調整をして参ります。

この積立方法は、すでに卒業ダンスパーティー参加費用等を含めた期生会費を夏冬の賞与時に分割で積み立てているため、その可能性はあるものと考えております。

なお、要領を変更する場合は、在学中の積立におけるインセンティブについて、同窓会会費に関する細則の改正を行う予定です。

(2) 同窓生著作等の寄贈事業(著作の対象範囲の拡大)

現在、人材バンク登録者を中心に直近3年間程度に発刊された防大同窓生の著作等から学生の希望図書を調査する資料を作成しております。しかしながら、防大同窓生の著作等のみでは本事業の趣旨「防衛分野の良書を寄贈し、勉学の一助にしてみらう」に沿う図書を寄贈することは困難な状況です。

このため、今後は寄贈図書の対象範囲を防大同窓生著作等以外にも拡充することといたしますので、引き続きご協力をお願いいたします。

【改正のポイント】

現 行	令和4年度以降
「防大同窓生」の著作等	「防大同窓生、防大同窓生以外の現役・OB自衛官」、防大同窓生等からの推薦」の著作等

(3) 令和4年度代議員会等の予定

令和4年度の代議員会につきましては、令和5年3月4日(土)にWebを併用した参集による代議員会等を計画し、状況により修正いたします。決定次第HP等で連絡させていただきます。

(4) ホーム・ビジット・デー(HVD)、ホーム・カミング・デー(HCD、HCD2)の予定

ア 同窓会事業として令和3年度の開校祭に併せて実施予定であった44期生のHVDは中止となりました。

令和4年度は45期生のHVDを実施する方向で今後、学校側と調整予定です。

イ 学校行事として令和3年度の卒業式に併せて実施予定であった22期生のHCDは令和4年度に延期されました。

ウ 学校行事として令和3年度の入校式に併せて実施予定であった8期生及び9期生のHCD2は令和4年度の入校式においても実施できず、令和5年度の入校式においては10期生及び11期生のHCD2を実施する方向で今後、学校側と調整予定です。

(終わりに)

令和4年度の防大同窓会事業が計画通り実施できますよう、重ねてご支援・ご協力をお願い申し上げますとともに、同窓会員の皆様が益々ご健勝で過ごされますことを心より祈念しております。

(同窓会総務部 河本 宏章(28期陸))

◇第44期生ホーム・ビジット・デー（HVD）

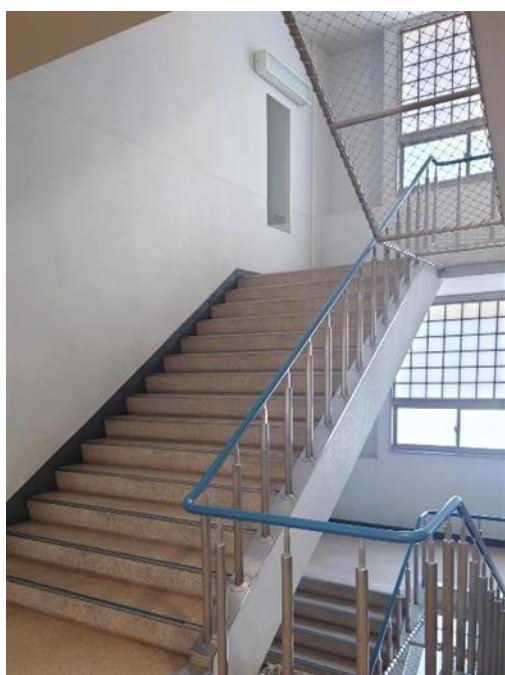
令和3年11月13日（土）にホーム・ビジット・デーの行事として本科第44期生を代表して、第2大隊首席指導教官尾崎元気1佐以下3名が久保学校長に対し表敬訪問し、1号学生舎及び3号学生舎に計2枚の姿見を寄贈して参りました。

久保学校長から防大の卒業生が国防の中核として活躍していることを頼もしく思うとのお言葉をいただくとともに、我が国を取り巻く安全保障環境は引き続き変動の時期にあり、激しい変化にも対応できるような人材の育成に取り組む意欲をお示しになりました。このような卒業20周年の行事を実施できたことは防大同窓会、防大関係者のご協力とご理解があつてのことであり、感謝しております。

さて、ホーム・ビジット・デーは防大卒業生が卒業20周年目の防大開校祭に家族を含めて参加させていただく機会であり、本来ならば、令和2年11月に実施を予定し、準備しておりましたが、令和2年の春頃から始まったコロナ禍の影響により、実施できませんでした。幸い同窓会や学校関係者のお計らいにより令和3年に延期させていただきましたが、新型コロナウイルスの状況が改善しなかったことから、この度防大勤務者だけで表敬訪問を実施する運びとなりました。約2年にわたって、準備を進める中で、対面での会議ができなかったことや2直制勤務となったことにより調整が難しい状況でありましたが、各幕同期の協力により困難を乗り越えることができたとともに、同期の絆を再確認することができました。



代表者（防大勤務者）による学校長表敬



寄贈した姿見(1号舎階段下より)



姿見(拡大)

(第44期生会長 高橋 秀典 記)

◇インドネシア共和国支部会員の近況

2022. 2. 1



ワヤン海軍中佐

インドネシア支部会員のワヤン・ウィジャヤ海軍中佐(本科第47期)から、インドネシア支部、会員の近況について情報提供がありましたのでご紹介します。

- 1 2021年12月15日、ジャカルタのアクマニホテルで実施された在インドネシア防衛駐在官水野秀紀1海佐(本科第46期)による防衛白書説明会において会員が通訳支援を行いました。

説明会にはインドネシア国防省防衛国際協力局長が同席しました。



防衛白書説明会の様子
(前列、向かって右が水野1佐、
左は防衛国際協力局長)



通訳支援する4名の会員たち



説明会終了後の集合写真

2 2021年6月、海上自衛隊練習艦隊「かしま」、「せとゆき」に対するインドネシア海軍最新鋭フリゲート「Gusti Ngurah Rai KRI-332」艦長のメッセージを日本語に翻訳しました。

艦長からのメッセージは、練習艦隊が実施した潜水艦 Nanggala 犠牲者に対する慰霊の行為に対して感謝の意を表したものです。



インドネシア海軍「G.N.R. KRI-332」を中央に、左「かしま」、右「せとゆき」

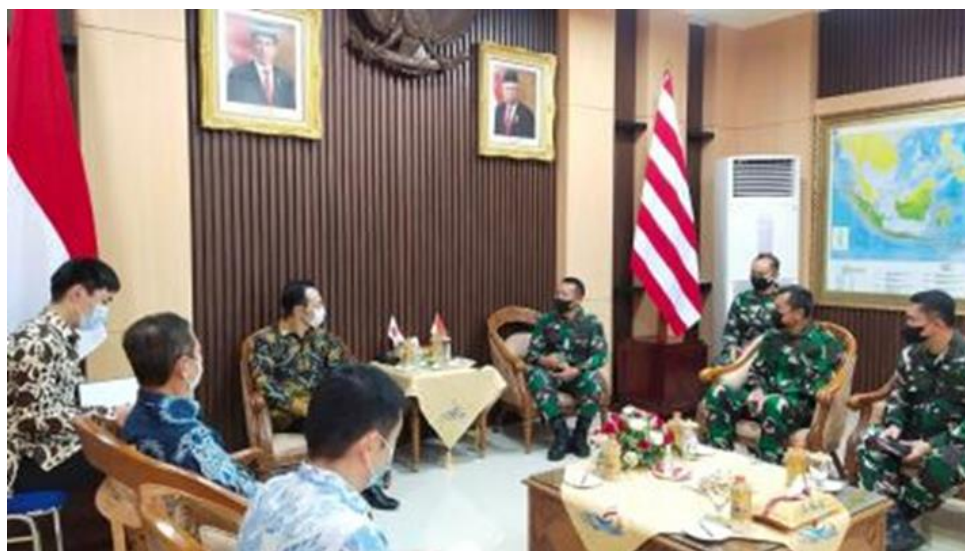
写真出典：在インドネシア日本大使館ホームページ(<https://www.id.emb-japan.go.jp>)

⇒ [プレスリリース「海上自衛隊練習艦とインドネシア海軍との親善訓練」](#)

-
- 3 2021年4月、インドネシア海軍誌「The Horizon」及び「Cakrawala」に、日本についての記事を投稿しました。



-
- 4 日本の要人がインドネシア海軍を訪問された際の通訳支援を実施しています。
写真は在インドネシア日本国大使がインドネシア海軍第2艦隊を訪問された際の司令官とのミーティングの様子です。



司令官後方で通訳支援を行う会員たち(正面向かって左が、在インドネシア日本国大使、右が第2艦隊司令官)



通訳支援した会員も一緒に記念撮影(中央左が、在インドネシア日本国大使、右が第2艦隊司令官)

- 5 インドネシア防大同窓生のホームページ (<http://www.obaradai.com>) を運営しています。
ホームページには適時に日本に関する記事を投稿しています。



(同窓会事務局 総務部 国際交流担当)

◆会長ルーム・活動録

◇令和3年度防衛大学校卒業式典への出席

2022.3.27

令和4年3月27日（日）に防衛大学校で実施された卒業式典に岩田同窓会長が出席しました。

岸田内閣総理大臣、岸防衛大臣、岩本政務官、統合・陸・海・空幕僚長等が臨席される中で、本科第66期学生、理工学研究科前期課程第59期学生、同後期課程第19期学生、総合安全保障研究科前期課程第24期学生及び同後期課程第25期学生の卒業式典が挙行されました。

今年も、新型コロナウイルス感染防止の観点から、卒業式典の時間短縮が図られ、卒業学生全員に対する卒業証書授与は前日の26日（土）に実施されました。また、HCD（ホームカミングデー）は来年へ延期となり、午餐会も中止となりました。出席する来賓も数名に限定され、ご家族等の卒業式典参加は見合わせとなりましたが、参加できないご家族等のためにYouTube「防衛大学校広報チャンネル」でのライブ配信（一般公開）が行われました。

卒業式では、久保学校長が学生代表17名に卒業証書を手渡され、式辞において「防大での厳しい教育訓練は10年、20年、30年、40年後に遺憾なく力を発揮できるよう人としての修養を積むことであり、これからも訓練と精進を続け国を守るため日頃から万全の準備をすることによって、国民に奉仕する皆さんの生涯がやりがいと誇りに満ちたものになることを祈念します。幸多き人生を歩んで下さい。」と述べられました。

岸田内閣総理大臣は、「『事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に努め、もって国民の負託に応える』今一度、このサービスの宣誓を胸に刻み、皆さん一人一人が国民の命と平和な暮らしを担う砦（とりで）であるという強い自覚を決して忘れないで、国民の信頼と期待に常に応える自衛隊であり続けるよう、皆さんが崇高な任務に全力であたることを期待します」と訓示されました。

来賓代表・元国家安全保障局長 谷内正太郎氏から「自衛隊創設以来、諸先輩の絶えない努力、献身によって国民からのゆるぎない信頼となっていることに誇りを持ち、自衛官という職業選択は国民からの信頼・尊敬を勝ち取ることに認識下さい。侍よ、武士（もののふ）よ、誇り高くあれ！」との言葉を贈られた卒業生は、代表による答辞、学生歌斉唱の後に、帽子を高々と舞い上げ、会場を後にしました。

その後、卒業生は陸・海・空の制服に着替え、再び記念講堂に戻り、岸田内閣総理大臣・岸防衛大臣臨席の下に行われた任命式で陸上・海上・航空幕僚長からそれぞれの一般幹部候補生に任命され、引き続き実施された宣誓式において陸・海・空一般幹部候補生として岸田内閣総理大臣に対し宣誓を行いました。

例年実施される観閲式（祝賀飛行は中止）は、3月18日（金）の卒業行事で実施され、卒業式典はこの任命宣誓式をもって終了しました。



内閣総理大臣訓示



来賓代表(谷内正太郎氏)祝辞



帽子投げ



陸海空一般幹部候補生の任命・宣誓式



岸田総理と学生との車座懇談



久保学校長と岩田会長との懇談

(30期陸 山坂泰明 記)

◇防大同窓会モンゴル国支部長に対する委嘱状授与

2022. 3. 25

令和4年3月25日(金)16:30から、市ヶ谷の防衛大学校同窓会事務局において、岩田同窓会会長からモンゴル国支部長に対する委嘱状の授与が、リモート会議システムを活用して行われました。

これまでの海外支部長への委嘱状授与は、会長が現地を訪問して、直接、支部長に対して手交されていましたが、今回につきましては、新型コロナウイルスまん延等の影響もあり、会長の支部訪問を諦め、日本国内において授与することになりました。

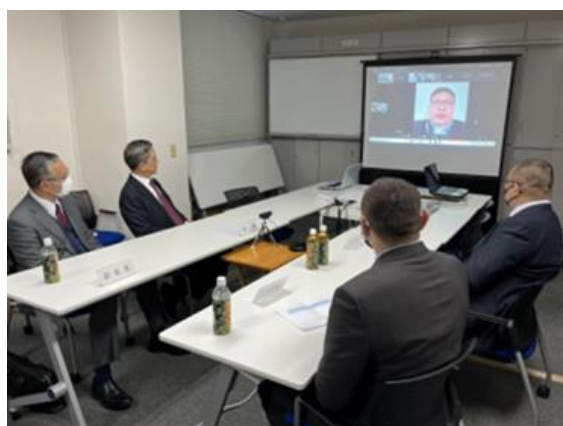
当初は、各期の代表が集まる代議員会での授与を追求しましたが、本年度もコロナ禍のため中止となったことから、会長、副会長、各理事等が参加する理事会に併せて授与を行うことになりました。

モンゴル国支部は、2017年7月に設立され、現在の防大留学生の受け入れ国18か国の中で、タイ、シンガポール、インドネシアに続く4番目の海外支部となります。会員は、本科卒業生、理工学研究科／安全保障研究科の卒業生等から構成されており、今回は、2021年7月から第2代支部長に就任したバトサイハン大佐(本科48期)に対する委嘱状の授与となりました。

モンゴルで参謀本部勤務のバトサイハン支部長は本国からリモートでの参加となり、モンゴル支部会員の駐日モンゴル大使館国防武官のエンフバト大佐(安保研10期)、並びに、本年3月まで陸上自衛隊指揮幕僚課程留学中であったバースカ少佐(本科53期)は市ヶ谷の事務局での参加を得ることができました。

委嘱状授与は、定時にリモートによりバトサイハン支部長の顔がスクリーンに投影されたところで開始となりました。

委嘱状授与開始時の様子



委嘱状授与参加者による集合写真

まずは、岩田会長とバトサイハン支部長が初対面の挨拶を交わした後に、会長が自身のモンゴル訪問の経験について述べたところ、支部長との接点があったことが判明し、やや緊張した雰囲気から和やかなムードに一変しての進行となりました。委嘱状の授与については、バトサイハン支部長がリモートで見守る中、岩田会長から支部長代理のエンフバト大佐に支部長の委嘱状を手渡しました。また、エンフバト大佐からはモンゴル国防省からの記念の盾が贈呈されました。

引き続き、会長からは、「2012年に統幕副長として『日モンゴル防衛相会談』、及び、2014年に陸幕長として『モンゴルにおける能力構築支援』に参加しましたが、これらの訪問時に受けた卒業同窓生からの熱い歓待から、防大同窓生の強固な団結を感じるとともに、リーダーとしてモンゴル陸軍を牽引している同窓生の姿に大変心強く感じました。モンゴル支部として、自衛隊とモンゴル軍、ひいては日本とモンゴルの関係強化、さらにはアジアの安定に貢献できるよう頑張ってもらうとともに、本年が日蒙外交樹立50周年の節目にあたり、更なる日蒙の関係の深化を期待します。」との挨拶がありました。

バトサイハン支部長からは、「モンゴル支部では防大留学経験者で大佐、中佐を中心とする約20名の会員が活躍しており、これからも防大同窓生として頑張っていく所存ですので、宜しくお願い致します。」との強い決意が示されました。



会長から支部長代理エンフバト大佐への委嘱状授与



会長への記念の盾の贈呈

最後に、リモート参加しているバトサイハン支部長が映し出されているスクリーンを囲む形で、岩田会長、村川副会長をはじめ、エンフバト大佐、バースカ少佐、各理事等の委嘱状授与参加者が加わり、防大同窓会モンゴル支部の今後益々の発展を祈念しつつ集合写真の撮影を行って、閉会となりました。



委嘱状授与参加者による集合写真

(30期海 浅岡 哲史 記)

◆連絡事項

◇令和2年度防衛大学校同窓会決算書

令和2年度一般会計収支計算書

令和3年3月31日現在

区分	事 業 等	02年度予算	02年度決算額	差 異	備 考	
一 般 会 計	収入					
	同窓会費	22,020,000	14,213,800	-7,806,200	84期 420名+0.98=381名	
	残貯金利息・国債利息	1,810,000	1,837,008	27,008		
	寄付	0	10,000	10,000	個人1名	
	雑収入	1,770,000	87,200	-1,682,800		
	収入合計(①)	25,400,000	15,948,008	-9,451,994		
	支 出	母校の充実・発展への寄与				
		1 各種奨励金支援	390,000	312,330	-77,670	奨励ポータル40万円
		2 別荘会費等支援	700,000	343,810	-356,190	
		3 学生の僻地実習支援	1,060,000	1,200,000	140,000	除菌スプレー代
4 顕彰碑顕花式支援		510,000	112,370	-397,630	総括作成	
5 同窓会誌等支援		2,070,000	0	-2,070,000		
6 校友会海外活動支援		1,000,000	818,080	-181,920	団体3、個人32	
7 学術向上策支援		185,000	198,801	13,801	防衛学特論世界研究への助費	
8 同窓会寄作等の寄附		50,000	33,818	-16,182		
9 国際交流支援		1,210,000	980,850	-229,150		
新コロナ対策支援	0	1,189,354	1,189,354	インフルエンザ予防接種、東京行軍支援		
小計(②)	7,175,000	3,393,011	-3,781,989			
会 員 相 互 の 親 睦 交 流	10 同窓会ホームページの運営	450,000	284,280	-165,720	サーバー借上げ、維持	
	11 会員の脱甲事務	300,000	383,382	83,382	市電乗賃等34名	
	12 各種奨励大会による交流	270,000	30,440	-239,560		
	13 卒業生主との交流	30,000	0	-30,000		
	14 HVD支援	320,000	440	-319,560	44期	
	15 HGD2支援	80,000	4,960	-75,040	8、9期	
	16 HGD支援	380,000	300,100	-79,900	21期	
	17 講演会・懇親会の実施	4,000,000	0	-4,000,000		
	小計(③)	6,010,000	1,003,582	-5,006,418		
	社会活動への寄与	18 安全保障講座支援	100,000	100,000	0	
小計(④)	100,000	100,000	0			
会 務 運 営 基 礎 の 充 実	19 代議員会の実施	900,000	398,797	-501,203	議案書、案内、中止案内印刷通信費	
	20 同窓会名簿の維持	30,000	82,100	52,100		
	21 別荘会名簿の作成支援	40,000	0	-40,000		
	22 会費納入の促進	480,000	327,384	-152,616		
	23 地域支援等の活性化	200,000	0	-200,000		
	24 地域支援等への助成	380,000	0	-380,000		
	25 防衛大同窓会との交流	30,000	0	-30,000		
	小計(⑤)	2,280,000	988,481	-1,291,519		
検 討 事 項	26 防大「高みプロジェクト」への貢献の症	25,000	13,828	-11,172		
	27 国際交流支援業務の検討	30,000	3,220	-26,780		
	小計(⑥)	75,000	17,048	-57,952		
経 理 管 理	事務費	800,000	744,438	-55,562		
	通信費	350,000	342,353	-7,647		
	交通費	380,000	422,190	42,190		
	会議費	220,000	81,227	-138,773		
	事務用印刷費	1,384,000	1,384,000	0		
	事務所賃借費	3,300,000	3,783,322	483,322		
	小原台事務局運営費	170,000	88,897	-81,103	WEB会議費付	
	小計(⑦)	9,204,000	9,004,229	-199,771		
支出計(②+③+④+⑤+⑥+⑦)	24,844,000	18,704,311	-6,139,689			
予備費(⑧)	358,000	0	-358,000			
支出計(⑩+⑧)	25,400,000	18,704,311	-6,695,689			
収入総計(①)	25,400,000	15,948,008	-9,451,994			
支出総計(⑩)	25,400,000	18,704,311	-6,695,689			
年度への繰り入れ額(⑩-①)	0	-2,756,303	-2,756,303			

同窓会事業予算「寄付会計」

令和3年3月31日現在

【単位：円】

区分	項目	予算額	決算額	差異	備考
寄付	寄付金(個人1名)	0	10,000	10,000	
	収入計(①)	0	10,000	10,000	
	支出	0	0	0	
	支出計(②)	0	0	0	
	令和3年寄付実績(②-①-②)	0	10,000	10,000	

※一般会計収支計算書の内数とした。

同窓会事業予算「特別会計」

令和3年3月31日現在

【単位：円】

区分	項目	予算額	決算額	差異	備考
特別会計	代金受入	0	1,075,800	1,075,800	
	収入計(①)	0	1,075,800	1,075,800	
	調達	3,000,000	2,841,870	-358,130	
	支出計(②)	3,000,000	2,841,870	-358,130	
	令和3年収支(②-①-②)	-3,000,000	-1,588,070	1,433,930	

◇令和4年度期生会長・代議員名簿

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏名	海：氏名	空：氏名	氏名	要員
1	深山 明敏(※)	陸					
2	高岩 利彦(※)	陸					
3	西元 徹也	陸	及川 雅道	手塚 正水	出口 哲夫	野本 眞二	陸
4	田中 厚彦	空	金田 孝之	藤岡 瑩	今西 邦大	藤田 健作	陸
5	福地 建夫	海	浅野 勇蔵	富 一郎	齋藤 賢爾	浅野 勇蔵	陸
6	阿部 英輔	陸	池田 勝	福塚 啓二	星野 元宏	福塚 啓二	海
7	山本 安正	海	安藤 正武	高木 基博	伊藤 文夫	落合 峻	海
8	古澤 忠彦	海	廣澤 澄晴	梶浦 邦夫	甲斐 聖彦	矢島 寛三	海
9	藤田 幸生	海	小島 捷利	長崎 嘉徳	日高 久萬男	吉橋 誠	陸
10	嶋野 隆夫	陸	嶋野 隆夫	坂東 勝昭	川田 哲雄	嶋野 隆夫	陸
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	阿保 文敏	陸
12	小早川 達彦	陸	藤本 四郎	串田 貫治	橋本 康夫	新倉 修	陸
13	牧本 信近	海	篠田 芳明	新宮領 篁	花岡 芳孝	寺口 聡	海
14	岡 俊彦	海	寄田 修	齋藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	瓦谷 育夫	平山 為祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	橘 恒紀	堀 好成	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石村 澄雄	海
18	杉本 正彦	海	植木 美知男	谷村 文雄	長尾 齊	谷村 文雄	海
19	岩崎 茂	空	師岡 英行	宮浦 弘兒	下平 幸二	風間 敏榮	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	渡邊 至之	今井 恵治	陸
21	河野 克俊	海	荒川 龍一郎	山本 高英	小野田 治	山本 高英	海
22	宮下 寿広	陸	田原 昭彦	松下 泰士	福井 正明	石野 貢三	空
23	岩本 豊一	陸	藤井 貞文	福本 出	清藤 勝則	岩崎 親裕	陸
24	杉山 良行	空	武内 誠一	原田 哲郎	半澤 隆彦	武内 誠一	陸
25	高鹿 治雄	海	岡部 俊哉	河村 正雄	吉田 浩介	徳丸 伸一	海
26	尾上 定正	空	深津 孔	堂下 哲郎	尾上 定正	山口 浩樹	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	橋本 尚典	小林 茂	陸
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	真鍋 浩司	渡邊 博史	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	長島 純	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	竹平 哲也	篠原 啓一郎	陸
31	前田 忠男	陸	山口 和則	今村 靖弘	後藤 雅人	山口 和則	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 頼昭	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	齋藤 聡	沖野 克紀	沖野 克紀	空

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏名	海：氏名	空：氏名	氏名	要員
34	佐藤 信知	空	荒井 正芳	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
36	寺崎 隆行	空	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	浅賀 政宏	濱崎 真吾	白井 亮次	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	富川 輝	空	村上 諒	佐瀬 智之	富川 輝	山口 景太	空
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	戸永 竜太	志津 雅啓	志津 雅啓	空
44	高橋 秀典	海	鈴木 攻佑	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	田村 弘範	海	石岡 直樹	近藤 太郎	寺林 洋平	向 康司	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	齋藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	松浦 秀俊	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一字	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一字	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	岡田 航	荒木 敬	成田 優	陸
53	濱田 卓	空	江嶋 宏次	松崎 圭祐	来栖 克則	濱田 卓	空
54	金澤 慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金澤 慧人	空
55	若月 豪	陸	若月 豪	中村 友哉	加治 政樹	若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	田中 結貴	舟津 貴正	松尾 聡一郎	陸
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	杓村 駿明	大藪 秀斗	我妻 国明	陸
58	河合 真	海	秋島 一弥	浦山 修太郎	河野 健	河合 真	海
59	屋代 昌也	陸	渡邊 一生	馬渡 淳司	宮川 啓一	屋代 昌也	陸
60	浜野 広大	陸	田村 洋人	畠山 尚己	庄司 和正	今尾 友哉	陸
61	久米井 勇馬	空	池上 好古	神作 友陽	工藤 将人	松本 龍二	海
62	上中 龍基	空	神木 康誠	唐川 航輝	江打 諒馬	熊木 礼於奈	陸
63	武石 太一	海	筒井 健司	笠原 豪	久保田 祥平	舟林 翼	陸
64	梅村 利海	陸	須田 悠介	森田 雄也	岡野 七海	門馬 明富	陸
65	吉田 敦	海	横山 慶次郎	坂東 涉伍	山本 悠馬	小俣 裕紀	陸

◇令和4年度同窓会本部役員名簿

職名	氏名	期	要員	
会 長	岩田 清文	23	陸	
副会長	磯部 晃一	24	陸	
	村川 豊	25	海	
	吉田 浩介	25	空	
	[統合幕僚長]	山崎 幸二	27	陸
理事	【事務局長】	山之上 哲郎	27	陸
	【事務局長補佐】	上尾 秀樹	29	陸
		佐藤 誠	26	海
		山田 真史	28	空
	[防大教授]	後藤 啓次	28	陸
	[統幕総務部長]	青木 誠	35	空
	[陸幕監理部長]	岸良 和樹	38	陸
	[海幕総務部長]	稲田 丈司	38	海
	[空幕人教部長]	倉本 昌弘	37	空
会計監事	川上 幸則	25	陸	
	増田 潤一	26	陸	
	小島 昌二	26	海	
	池畠 暢也	26	空	

◇令和4年度地域支部等役員名簿

所属支部	役職	氏名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤 幸治	14	陸
	事務局長	宮本 真也	41	陸
東北地域支部	支部長	赤坂 徹	17	陸
	事務局長	浅川 紀明	25	陸
栃木地区支部	支部長	正岡 富士夫	15	空
	事務局長	正岡 富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	西川 清	15	陸
東海拡大地区支部	支部長	赤谷 信之	13	陸
	事務局長	横山 昌宏	22	陸
関西地域支部	支部長	酒井 健	19	陸
	事務局長	大島 龍一朗	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡 元	10	空
	事務局長	山本 洋	21	陸
島根地区支部	支部長	西村 充雄	25	陸
	事務局長	持田 佳郎	13	陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空
	事務局長	永岑 富彦	10	陸
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海
	事務局長	土肥 弘実	25	海
山口地区支部	支部長	前田 房彦	13	空
	事務局長	山下 重夫	16	陸
四国拡大地域支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
徳島地区支部	支部長	福田 忠典	11	陸
	事務局長	山崎 忠雄	19	陸
香川地区支部	支部長	宇草 茂	18	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
愛媛地区支部	支部長	瀬川 紘一郎	10	海
	事務局長	森川 建司	22	陸
高知地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	川田 公一	16	空

所属支部	役職	氏名	期	要員
九州地域支部	支部長	野田 文久	24	陸
	事務局長	田代 勉	25	陸
福岡地区支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
佐賀地区支部	支部長	福井 秀平	23	陸
	事務局長	福岡 龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	大平 慎一	16	海
	事務局長	広井 豊明	21	海
熊本地区支部	支部長	佐藤 晃章	19	陸
	事務局長	長尾 民穂	19	陸
大分地区支部	支部長	藤田 太	20	陸
	事務局長	加来 仁信	23	陸
宮崎地区支部	支部長	大岐 継寛	15	陸
	事務局長	金丸 直史	19	空
鹿児島地区支部	支部長	柴村 敬二	18	陸
	事務局長	樺山 一孝	29	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜 邦夫	21	海
	事務局長	金子 賢太郎	55	空
小原台クラブ	会長（支部長）	長谷川 礼司	17	空
	事務局長	及川 正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口 千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津 悠加（黒田）	45	空

◇令和4年度事務局員名簿

職 名		氏 名	期	要員	
総 務	部 長	河本 宏章	28	陸	
	副部長	畠野 俊一	28	海	
		飯田 重喜(兼)	28	陸	
	補 佐	総 務	平栗 浩一	29	陸
		新規事業	森竹 賢全	29	海
		国際交流	馬場 邦夫	29	陸
	担 当	総 務	山坂 泰明	30	陸
		国際交流	兒玉 豊	30	陸
			浅岡 哲史	30	海
		坂尾 陽子	常勤		
人 事	部 長	佐々木 博茂	28	陸	
	補 佐	後藤 一郎	29	陸	
		渡辺 辰悟	29	陸	
	担 当	古賀 安彦	30	陸	
		淵崎 直樹	30	海	
		宮本 裕徳	30	空	
経 理	部 長	橋口 信吾	29	海	
	副部長	間瀬 元康	28	陸	
	補佐(特定事項)	大林 一洋(兼)	29	海	
		小山 武徳	30	空	
	担 当	浦野 与志生	30	陸	
事 業	部 長	飯田 重喜(兼)	28	陸	
	副部長	平野 剛	28	陸	
	補 佐	HCD/HVD	重信 勝利	29	陸
		HCD2	荻原 洋聡	29	海
		囲碁等	大林 一洋(兼)	29	海
		テニス/支部	松宮 康一郎	29	空
		ゴルフ/講演	西村 弘文	29	空
	担 当	HCD/HVD	大西 正浩	30	陸
		HCD2	川原 梅三郎	30	海
		囲碁等	時久 寛司	30	海
		テニス/支部	森末 浩史	30	空
		ゴルフ/講演	益子 卓	30	陸
	広 報	部 長	白井 一弘	28	陸
副部長		相原 武士	28	空	
部顧問		村田 和美	17	陸	
補 佐		人材バンク	坂間 輝男	29	陸
			鶴見 知樹	29	陸
		機関紙	大嶋 基司	29	空
			佐々木 輝幸	29	海
		H P	時藤 和夫	29	空
			大森 俊之	29	陸
担 当		人材バンク	穂村 佳和	30	陸
			荒川 純一	30	海
		機関紙	野崎 忠明	30	陸
			池田 五十二	30	空
		H P	岩崎 仁彦	30	空
	中津 敏文		30	陸	

◇令和4年度小原台事務局員名簿

部	役職	氏名	期別	要員	
小原台 事務局	事務局長	北川 英二	3 6	空	
	事務局長補佐	寺田 博之	3 3	海	
		大石 徹郎	3 6	空	
		吉春 隆史	3 8	陸	
	総務部	部長	中澤 信一	2 8	海
		補佐	小堀 紀子	4 0 W	海
			天貝 崇樹	3 6	空
			佐久間 祐樹	4 9	空
	人事部	部長	別府 万寿博	3 6	空
		補佐	内田 周	4 5	陸
			多久 涼平	5 8	陸
	経理部	部長	小林 伸嘉	3 6	空
		補佐	岩切 宗利	3 7	陸
	事業部	部長	村上 強一	3 1	空
		補佐	山口 勇	4 4	陸
			永田 和人	3 8	陸
			出口 紋子	5 4 W	陸
	広報部	部長	柵木 徳之	4 1	陸
補佐		時吉 誠	4 3	空	

◆編集後記

新型コロナウイルス感染の影響は未だに継続しており、多くの同窓会行事が縮小又は中止となったことから、令和4年度機関紙「小原台だより」は、従来よりも記事数を目減りさせざるをえませんが、ご寄稿頂きました方々をはじめ、各行事及び事業にご支援頂きました多くの皆様方の熱意により発刊することができました。この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。「小原台だより」第29号は、電子版としては第7号の発刊となりました。引き続きホームページのアーカイブとして、記録保存の意義を重視し、同窓会の年度の総括として役立つように努めて参ります。今後とも電子版「小原台だより」のご愛顧とともにご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(防衛大学校同窓会本部事務局 機関紙担当記)